

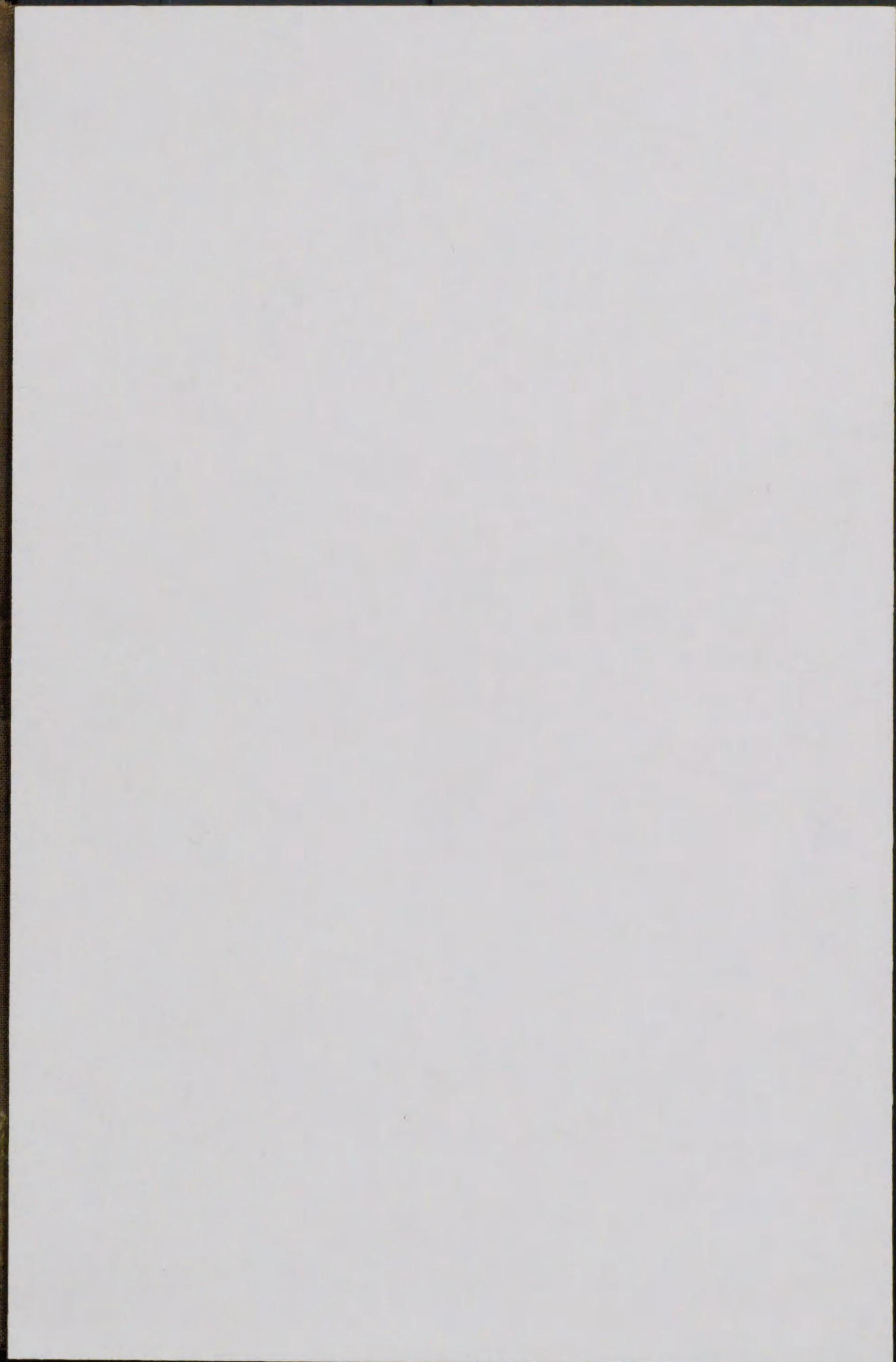
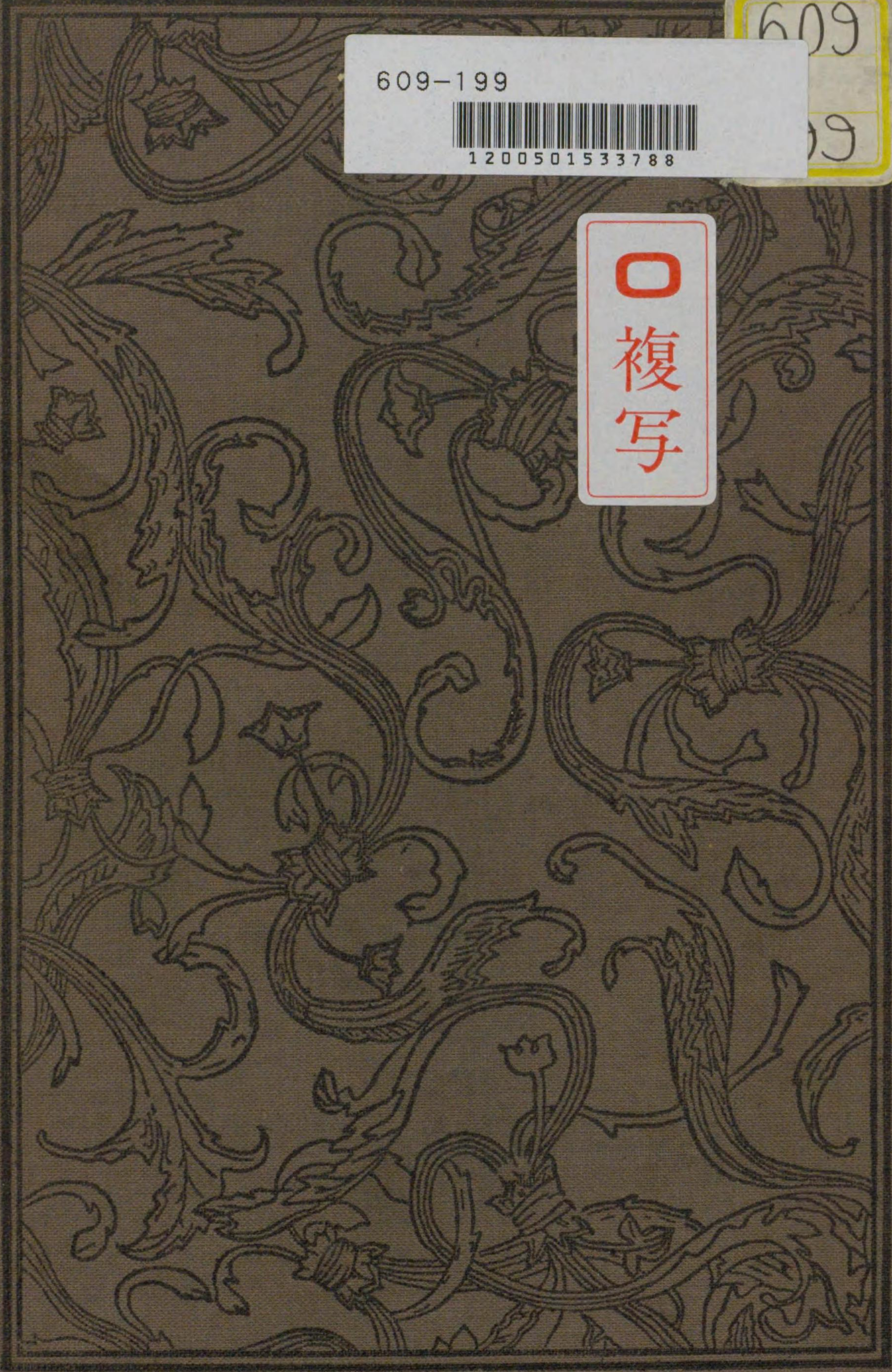
609-199



1200501533788

609
09

口
複
写



468

釋宗演述

禪の解剖

(肉と血と皮)

東京中央出版社刊



釋宗演述

禪の解剖
(肉と血と皮)



東京中央出版社刊

山堆屍
血凝于

流血
心指

羅刹
今烈

毒在
汝播

兆兆
先照

艾家
雪

已未之
里試
毛

今曉喜看撥亂兆。旭光先照芙蓉雪。
山堆屍矣河流血。白哲修羅戰何烈。

前圓覺寺派管長 釋宗演老師墨蹟

はしがき

初祖達磨大師、其徒、道副に謂つて曰く、汝は吾が皮を得たりと。また、尼、總持に謂つて曰く、汝は吾が肉を得たりと。また、道育に謂つて曰く、汝は吾が骨を得たりと。最後に二祖神光に謂つて曰く、汝は吾が髓を得たりと。悟道の證果、固より各人各異と云ふを得べきも、禪もと兩般あるに非ず。否な、一箇の佛字を説き一箇の禪字を道ふも、共に満面の慚惶たり。何ぞ況んや禪の解剖をや。古人曰ふ、向上の一路は千聖も不傳と。然れ共、また、許多の葛藤あり。即ち、禪は語に非ず、黙に非ずして、而して亦た語なり黙なり。此間の消息、宜しく冷暖自知すべくして、言説すべからず。

本書「禪の解剖」は、近代禪門の巨匠たる釋宗演禪師が、粥前茶後の坐談、及び、法話、若干を輯録せるものなり。禪師が縦横無礙の快辯は、不言々の妙諦、不説々の

眞源、説き得て盡くさざるなく、はしがき 利刃一閃、皮を裂き、肉を切り、骨を削り、髓を
 剔抉して、えきけつ 名醫の刀を揮ふが如し。めい 後學の初機、須らく就いて箇の無舌人の言に參
 ぜよ。

昭和六年二月

編者識

目次

生死は一如なり……………一

一、眞の意義ある生活を……………一
大聖釋尊……一箇の乞食沙門として……生死の大問題を解決せんが爲め……精神
 的生活……生老病死の四苦……無限の生命

二、吾人は大生命の一部分……………四
無始劫來より盡未來際に至つて……千態萬狀の中に自己を認める……生命の力
 ……此の端的を確り體得しなければ

三、慧玄が這裏に生死なし……………六
漸源と道吾和尚……生か死か……道はじ道はじ……石霜和尚……關山國師……生
 死事大無常迅速

四、深草の閑居夜雨の聲……………九
生死は瞬間の閃き……夜半に嵐の吹かぬものは……活動して死ねば其れで本望
 ……理窟で會得しても駄目……常に安穩に平和に

目次

信の一字

一、寂寥たる精神界

何れも一の樂器と一卷の聖書とが……多少に拘らず宗教的興味を有つて……宗教家と教育家は精神的に相一致して

二、信とは何ぞや

信とは眞實偽りなき心……目に見えぬ神に向ひて慚ぢざるは……之れ有るが爲めに國家社會は安らげく……無限に通ずる信仰……絶對に通ずる信仰

三、美花は汚土に生ず

娑婆即寂光淨土……煩惱即菩提……大安心……大立命……宗教的情操が社會に遍滿すれば……各方面の事業は活躍して

人生は大夢なり

一、五蘊所成の身

無自性不可得……五蘊皆空なり……我れが俺れがと執着してみた所で……人生七

二、酒々落々たれ

千古來稀れなり

三、樂み春の如し

此世の現實が夢……悲觀的であつてはならぬ……執着するが故に囚はる……天馬の空を行くか如き境界

無邊の風月

一、詩の味はふ可き點

不盡の乾坤燈外の燈……詩禪一味……一法として人に與ふる無し……一字不説……松島やあゝ松島や松島や……冷暖自知せよ

二、肉眼ばかりでは見えぬ

一切萬物……森羅萬象……塵の如く唾の如し……我が禪門の謂ゆる心眼……眞は風を知り穴は雨を知る……一種の神通

三、心を中心としての問題

山阿鐵舟居士……三遊亭圓朝……心の眼の落語……延壽太夫の清元……超化學……超哲學……奇なる哉、一切衆生は、如來の智慧徳相を具有す

四、此處が所謂宇宙の生命……………四一

現在は早や過去……………未來は又た現在……………轉々として盡くるなし……………生死輪廻……………夏に涼風あり……………冬に白雪あり

五、何くも同じ秋の夕暮……………四三

柳櫻をこきまぜて都ぞ春の……………悲觀もなければ樂觀もない……………日々是れ好日……………感謝の念に溢れる……………一心不亂に念佛三昧を修して

六、瑞巖和尚の自問自答……………四五

神や佛にたづねる迄もない……………自分自身の心に向つて……………主人公……………惺々着……………他を漫じ自らを漫ずる兩般もなければ……………釋迦何人ぞ我れ何人ぞ

差別に處する難……………五〇

一、萬物もと是れ平等……………五〇

人間は元來佛と同じもの……………草木國土一切成佛……………伊太利統一の勇士ガルバリヂ……………四河海に歸して同一鹹味……………四姓佛に歸すれば同一釋氏……………宇宙は一金萬器

二、差別觀念は建設思想……………五三

花は紅、柳は綠……………人間の差別觀……………平等思想よりも進歩し成熟せるもの……………社

三、亂臣賊子たる勿れ……………五六

理の顯現は秩序……………秩序の體は差別……………徒らに我見に囚はる……………帝王親權說……………理に順つて心を起せば善となる……………理に逆つて心を起せば惡となる

會は無差別では存立し得ず

大道周行……………五九

一、吾道一もつて貫く……………五九

孔子の道統を得たるは曾參一人……………人見て法說けの手段……………狗子に佛性ありや……………孔子の眞意は深遠微妙

二、花も蟻も一小天地……………六三

道は茫たり漠たり……………對待的の物では無い……………嶄然として獨立す……………已むを得ず字して道といふ

三、道は神と共にあり……………六七

一とは二に對するの二に非ず……………道の體たるや甚だ言ひ難し……………我法妙にして思議し難し……………至道は無難なり

心は明鏡臺の如し……………七一

自心を欺くこと無ければ……自己本心の發露するところ……宗教は躍如として現はれん……夜もすがら佛の道を求むれば……我れは人を以て鏡となす……善人すら猶ほ往生す、況んや悪人をや

生まれぬ先きの面魂

不思議不思議……南無阿彌陀佛と一心に稱へる時……南無妙法蓮華經と渾身これに成り切る時……聖道門と淨土門……通心徹心自他一如……田の草を取りて踏み込む肥料かな

驢を渡し馬を渡す

一、如何なるか是れ石橋

趙州從諗禪師……久しく趙州の石橋と響く……汝略約を見て石橋を見ず……實に樂な自由な解脱した……本地の風光

二、如何なるか是れ灌溪

達磨大師……黃蘗……臨濟……德山……雲門……其の手段は孤危險峻……唯だ言句を以て人を殺活す……海に入つては須らく巨鼈を釣るべし

三、又た一點あり

和尚は善知識なり何んとして塵ある……外來底……清淨の伽藍、何んとして塵ある……そら又た飛んで來た

四、大道長安に透る

如何なるか是れ道……墻外底……這箇の道を問はず……都長安まで眞直ぐに……至道無難、異途なし

五、雲は天に水は瓶に

禪家の商量……拈じ來つて着々親し……李翱と藥山……汝何ぞ耳を尊んで身を卑む……我來つて道を問ふに餘説なし

六、喫粥し了れりや

學人乍入叢林、請ふ指示せよ……鉢盂を洗へ去れ……平凡な問答なれど……趙州和尚の五臟六腑か光を放つて……萬事放下着の境界

七、一領の布衫重さ七斤

常識を超えた言句……天下無比……萬法一に歸す……一味平等の本體界……佛見法見の論量を超越す……直下に趙州の奥裡に參せなければ

八、米山の解打鼓

習學これを聞といふ……絶學これを鄰といふ……二者を過ぐるものは眞過とい

丹霞燒佛の話

.....九四

向下向下.....一切萬有を超越した精神.....一切衆生悉有佛性の見地.....無差別平等.....我れ焼いて舍利を得んと欲す.....木佛何ぞ舍利あらん.....院主自ら眉鬢墮落す.....向上の玄底を叩いて爲人の作略を示す

歸省禪師の脚下點檢

.....九六

浮山の圓鑑和尚.....天衣山の義懷和尚.....家風頗る嚴冷枯淡なるを聞き.....汝等去らずんば我れ汝等を打せん.....不惜身命の修行振りを.....餘程志氣の堅固な者でない

夙に起き時を使へ

.....九八

一、一日の計は朝にある

.....九八

早起は成功の二要素.....最初の出発點が大切.....千里の行程も一歩より.....成功と不成功とは僅かの違ひに基むす

二、來る日もく唯今日

.....九九

人間の一生は今日を積み重ねて行く.....筆をもつ人は筆もつたまゝ.....算盤弾く人は算盤弾き乍ら.....一向の信念

三、早く起きて考へよ

.....一〇一

死と生とは夜と晝の如し.....己が職分に終始せよ.....かゝる心掛けを以て.....必ず實行せよ

四、徳川家康の教訓

.....一〇二

金の生る木.....正直.....働き.....天海僧正の教訓.....金の散る木.....嘘吐き.....短氣.....悋氣

五、嘘は惡の始まり

.....一〇四

罪惡の源は嘘言にあり.....結局のところ正直でなければ.....嘘から出た誠.....誠から出た嘘

六、時に使はるゝ勿れ

.....一〇五

一番最初が大事.....人間の活動の始めは朝.....吾物と思へば輕し笠の雪.....汝等諸人は十二に使はる.....死命を使ふ勿れ

大なる樂觀の上に

.....一〇八

一、千差萬別の情緒

.....一〇八

月見れば千々に物こそ悲しけれ……此世をば我世とぞ思ふ望月の……樂觀と悲觀
……宇宙人生の本體は悲樂を超越す

二、四苦八苦の人生……………二二

各人には欲望あり……善用せば意志の力となる……知識欲……生存欲……名利欲
……生老病死……哀別離苦……人生に到底免れざるもの

三、偉大なる宗教心……………二四

世の中には不満足に出來て居るもの……悲觀の極自ら宗教的精神起る……神佛を祈
れ、神佛を念ぜよ……渾然同化せよ

四、永久不變の大道……………二六

此の宗教的大精神は各人生まれながらに有す……此の大精神大信念に坐して人生
を眺めると……たとひ形骸は土に歸するとも

正法に不思議なし……………一九

一、晴れた日は晴れ……………一九

いくら悟つたからとて……奇術師以上の靈當を演じ得ず……女は女……男は男……
……奇特も不奇特もない

二、百丈の獨坐大雄峰……………二〇

如何なるか是れ奇特の事……句裏に機を藏す……活機活用……天魔外道も窺ふを
得ず

三、障子の引手峰の松……………二三

悟り了れば未悟に同じ……火打袋に鶯の聲……明歴々露堂々……身心脱落の境界

四、機類に應じて導く……………二四

喫茶喫飯……痢尿放尿……すべてが悟らぬ以前と……佛來れば佛現ず……魔來れ
ば魔現ず……水鳥の行くも歸るも跡絶えて

禪と鎌倉武士……………二六

一、花は櫻木人は武士……………二六

佛教各宗の眞髓は悉く禪……曹洞禪……臨濟禪……相似禪……野狐禪……一種の
納が聯想

一、鎌倉に於ける宗教……………三〇

鎌倉の武力……鎌倉時代の新宗教……鎌倉以後の佛教……一は貴族的……一は平
民的……日蓮上人の活きた題目……法然上人の力

三、禪宗は何んであるか 一三三
 禪宗は極めて簡單明瞭……莫妄想……即身即佛……他力と云はず自力と云はず
 ……宇宙の根本……人生の眞歸趣

四、確乎不拔なる中心 一三六
 國には國の中心……人には人の中心……精神的統一……武士道……大和魂……英
 國の敵は英國の富……敵國外患なきものは滅ぶ

五、日本の敵は何であるか 一三八
 單純なる物質主義……極端なる黄金崇拜……泣言を嫌ふ……紛々芸々たる亂麻の
 如き状態……日本國民の精神上の危機

六、歴史の事實に就て 一四一
 頼義氏の毒筆……佛教を信ぜし泰時時頼時宗……宗旨には門外漢の義時高時……
 北條氏の治績

七、武士道を組織的にした 一四二
 泰時と明恵上人……治國の要……先づ欲を去れ……千舌の名言……樂屋の苦心
 ……時頼と道元禪師……大覺禪師……聖一國師……偉大なる感化

八、膽斗の如き相模太郎 一四八

誰か言ふ弱き者と

一、心裏の夜叉と天人と 一六二
 弱き者よ汝の名は女なり……一本の頭髮よく大象を繋ぐ……英雄豪傑を掌上に弄
 す……妖婦……毒婦……執金剛神

二、電光影裏春風を斬る 一六六
 圓覺寺の開山佛光國師……元兵の侵入……泰然自若として白刃に臨む……如大禪
 尼……俗名千代能……佛國のジャンダーク……羅馬の愛國者ブルタスの妻……地
 獄遠からず極樂眼前に在り

三、大慈大悲の觀音菩薩 一七〇
 女人と最も因縁深し……媽姐……觀世音菩薩の化身……拔苦與樂の神通力……勇

猛の士も亦た信仰す……聖徳太子……田村磨將軍

四、慈悲心は其儘勇氣也……………一七四

法華經普門品……大火に入るも火も焼く能はず……勇氣は其まゝ慈悲心……女の慈悲同情心は小なり……大慈大悲の同情心たれ

敬神の念を起せ……………一七七

一、眞面目なる精神……………一七七

敬虔なる兵士……美なる感情……一知半解の相對的知識……此の精神の力……外形の問題に非ず

二、明治天皇の御製……………一七九

目に見えぬ神の心に通ふこそ……百千萬の教訓にも優る……家庭教育……學校教育……身を以て人に示せ

三、神化し靈化せよ……………一八〇

祖先崇拜……偶像崇拜……愚鈍と貶すは誤り……憐むべき淺見……糞土も光明赫々たる物に……信仰の力

獨園和尚の禪機……………一八三

やんわりした中に鋭い禪機を……同志社某の相見……胸中に策略を定めて……和尚の横顔に一掌を……間に髪を容れず突然起つて……禪機……大機大用

暗夜に靈光を……………一八六

明代の大聖王陽明……見聞覺知は外賊なり……情欲意識は内賊なり……主人公愷々不昧にして……賊化して家人となる……煩悶解決法……直指人心見性成佛

蛙飛び込む水の音……………一八九

俳人芭蕉翁……佛頂和尚……如何なるか是れ閑庭草木裡の佛法……葉々、大抵は大、小抵は小……今日の事作廢生……雨過ぎて青苔濕ふ……其角……杉風……雪

自己を究明せよ……………一九三

一、釋尊弘教の第一聲……………一九三

四河海に歸して復た河の名なし……釋尊の本懐……一時的の安樂に眩惑せられず……永久の安樂平和を……我れ一大事因縁のために

二、我は天地の顯現なり……………一九六
 馬祖道一禪師の説法……汝等諸人自己これ佛なるを信ぜよ……和尚什麼としてか
 即身即佛と説く……心に非ず佛に非ず……隨所に主となれば

三、天上天下唯我獨尊……………一九九
 學問才能財産ある人の過誤……食着より起る……解脱任運の境界……假我……小
 我……我見……大我……眞我……唯我の活躍する所に

四、生命あつての物種……………二〇〇
 大切なるは健全なる身體……勇猛精進も矢張り……病軀に鞭ち虚弱なる身體を引
 き立て、

五、無師獨悟の釋尊……………二〇一
 釋尊の出家苦行……苦行外道の仙人……老子……吾れに大患ある所以のもの……
 灰身滅智の冷塊……菩提樹下の大禪定

六、永久の平和と安樂……………二〇四
 一たび慈悲の眼を開けて……瞬間の快樂のみ追うて……榮枯盛衰愛別離苦に食着
 して……自分と同じく涅槃を得るやうにと

隱徳を積み……………二〇七

一、隠れたる土臺石……………二〇七
 縁の下の力持ち……宏壯な建築の陰には……人事百般すべての事が……形には見
 えぬが隠れたる偉大な力

二、司馬溫公の家訓……………二〇九
 善善の名の下に偽善を……險徳を冥々のうちに積んで子孫長久の計を……頗る名
 言

三、誠拙和尚と五百兩……………二一一
 近世の高僧……圓覺寺山門の建立……海津傳兵衛の献金……お前が功徳を積むの
 に納が禮を

四、佛教の謂ゆる無我……………二一四
 言ひ易く實行は難し……健全なる道徳心の進歩……健全なる宗教思想の進歩……
 羅馬の末葉

五、千光祖師の慈悲……………二一七
 一步進めば大同情……社會人心の根抵と……我身を抓つて人の痛さを……佛像の
 金箔を剥いで

六、丹霞、木佛を焼く……………二一九

雲泥月籠の差……物體以外に立派な佛あることを……一休物語……奇言奇行を眞似るな

向上と向下の修行……………二三

一、進歩か然らずんば退歩……………二三

世界の文物は日にく進歩發達を……政事……法律……經濟……軍事……教育……國家は國家としての向上を……個人は個人としての向上を

二、行は童子の足下を拜す……………三三

目は高く天を……足は低く地を……脚下照顧……意は毘盧の頂額を踏んで……處世の箴と

三、向上向下は離る可らず……………三五

佛何者ぞ我れ何者ぞ……一切萬有を超越した精神……切衆生悉有佛性……行持綿密

圓朝の新桃太郎……………三七

山岡鐵舟居士と三遊亭圓朝……桃太郎の昔話……舌を切り口を結んで語れ……沈思研究すること三年……獅子迷子の訣

中澤道二翁の教訓……………三三

心學の大家……道二先生へ相談……以ての外の心得ちがひ……皆な當座の出來合ひ了見……噛み砕いての教訓

智情意の三修養……………四一

一、修養は漸以て進む……………四二

桃栗三年柿八年……嚼味すれば大いに意味あり……高きに登るには低きよりす……深きに往くには淺きよりす

二、修養法の二大別……………四三

身體よりするの法……精神よりするの法……密接な關係……表と裏……唯心論者……唯物論者

三、理・智・用の完全を……………四五

ハーバート大學の故ゼームス氏……心といふよりは先づ身體に……全身の力を氣海丹田に……眞善美

四、智的情的の修養……………四六

生まれると同時に智慧が開けて行く……疑問が起る……疑問は半ば解決なり……
文學……美術……八幡太郎義家

五、強き意志の力を……………二五〇

意的修養……心の力……智慧は頭……情は胸……意志は足……一心不亂に進め
……堅實に鍛へ上げよ

不轉不動なれ……………二五三

一、其心を大山にすべし……………二五三

道元禪師の教訓……波風の荒い人生を……八風吹いて……不轉不動の境界……魏
然たる大山の如く

二、八風吹けども動ぜず……………二五五

大死一番して動靜を超越せねば……人生百般の事に處して蹉跌なく狼狽なく……
大歡喜……大安心……大決定

三、無碍自在の妙手段を……………二五七

轉と不轉と動と不動とを……動中に處して動に束縛されず……靜中に處して靜に
聖碍されず……日蓮上人……法然上人

武士道を他にも及ぼせ……………二五九

一、武士道は日本の誇り……………二五九

天然の氣候……風俗の純朴……人情の敦厚……山水の明媚……武士道……日本國
有の道徳を發揮せるもの

二、官尊民卑の弊を去れ……………二六〇

武士道と對照して大いに遜色あり……土百姓……素町人……自らも侮り他からも
侮らる……獨立自營の人

三、發達せざる宗教……………二六一

事實の反するを如何にせん……不徳道なる日本商人……爛漫たる櫻花の如く……
玲瓏たる富嶽の如く……宗教心の發達せざるに起因す

四、萬物の長たる所以……………二六三

崇高なる信念……ラッド博士……ハリソン博士……祖先教……孔子教……神道

五、偉大なる宗教の力……………二六四

永久不變の靈光……佛の無限大悲の慈光……宗教の特色……天下を席捲した織田
信長……石山寺に立籠つた一向宗徒

六、解信仰信の二門……………二六七

宗教の情想は有難しの一念……猛然たる勇氣……淨土門の本領は慈悲、聖道門の本領は智慧……不離不二の妙趣……智情意……智仁勇……戒定慧

七、佛教を誤解する勿れ……………二六九

一切諸法の根柢は平等……神人合一の理想……佛教は悲觀的のものに非ず……社會上に於ける活動の原動力

宗教的善行……………二七二

一、積善と陰徳の二つ……………二七二

教育の目的……偏輕偏重の弊……卑しむ可き相對的行爲……陰徳……左手の爲すところ右手に知らしむる勿れ

二、達磨大師の無功徳……………二七三

梁の武帝……佛心天子……建寺度僧何の功徳かある……無功徳即ち大功徳……無限大なる善事

三、一身を犠牲にして……………二七四

七度び生まれて國賊を滅さん……北條時頼の諸國通歴……ワシントンの大功業と其の謙徳

四、阿賭物の爲にせず……………二七九

名人巨匠の心懸げ……凡人の企及し難き點……讀者を魅了する力……月邊遊女の衣に描く

支那及び支那の宗教……………二八〇

一、尨大なる國土……………二八〇

不可解の國……大と稱すれば大……小と見れば小……四千年來の歴史と文明を有する……驚くべき繁殖力と勞働力

二、微弱なる國民……………二八二

國民として誠に小……極端なる個人主義……兵制……亂雜なる宗教……道教……孔子教……耶蘇教……回々教

三、道教と孔子教……………二八四

支那人間に根柢深き二教……根本の宗旨は極端に相違してをる……道教は平等教……孔子教は差別教

四、支那の佛教……………二八七

佛教の本來の面目……差別即平等……平等即差別……一面から見れば超世間……

五、現時の儒・道・佛 二八九
一面から見れば入世間.....土に依つて起つものは土に依つて倒る

儒教は記誦辭章の學問の如くなりて.....道教は飽くまで現世の物質的欲望を満足せんことを祈願する手段となりて.....佛教は僅かに山林に餘喘を保つ.....佛教は決して貴族的ではない.....四河海に歸すれば同一鹹味

六、支那の國狀と宗教 二九一

有徳の大人物に非れば統一の大業は.....是非共立派な宗教の援助を必要.....廣大深遠な佛教でなければ.....日支兩國の國交について.....利權獲得に熱中するを止めよ

病中の感想 二九四

一、病中は病氣を相手 二九四

病氣の時は病氣と親む.....病氣になつたら病氣になり切る.....病氣の時は病氣の儘に

二、死にともなかつた 二九五

一休和尚の故智を學ぶにはあらねど.....漸く人生の半ばを過ぎてこれから少しづつと云ふとき.....報恩の仕事をしたいと.....天地の恩に報いたいと

三、眞似をしたくない 二九九

立派な御手本はあるが.....其日々の自分の務めをしながら.....人間として爲すべきことを爲しつゝ.....衲一箇の極樂

四、理想的の死に方 三〇一

ソクラテースの死ぬ時.....衲の理想に適つてをる.....病氣に打ち勝ち健康にならなければならぬ.....一種の宗教的信仰.....かくして始めて人間の務めを果し得る

自性の徹見 三〇五

一、野にも山にも一杯 三〇五

人間の本性本體.....古今東西にわたつて不變不改のもの.....即今上人の性何くにありや.....兜率の三關.....聲はすれども姿は見えぬ

二、眼前口頭其儘が禪 三〇六

禪なきは佛教に非ず.....南無妙法蓮華經.....南無阿彌陀佛.....佛法は障子の引手峰の松.....有らゆる學問の原理を教へるもの

三、八面玲瓏の眞面目 三〇八

主人公.....佛性.....眞性.....眞空妙有.....惡平等.....惡差別.....不即不離のとこ

ろが……廬山の眞面目……人間到る處自由平等の天地あり

四、天何をか言はんや

無言の雄辯……不言の説法……眞理に到達するまでのホンの道程……詮じ詰むれば宇宙の實在に入つて……洪大にして無窮……寧ろ眞理の汚點……………三〇九

菜根譚十則

……………三二二

君子の心事は天青く日白く……耳中常に耳に逆ふの言を聞き……徑路窄き處は一歩を留めん……世を蓋ふの功勞も一個の矜の字に……家庭に個の眞佛あり……花盆内に居れば生機に乏し……山林の樂みを談ずる者は未だ必ずしも……鳥語蟲聲も傳心の訣なり……有字の書を解して無字の書を……一字識らず一偈參せずとも

快人と快馬

……………三二六

一、快人の一言

……………三二六

二、獻身的辨道

寸鐵肺肝を刳ぐるの機用あり……一隅を擧ぐれば三隅を知る……實參實究……………三二九

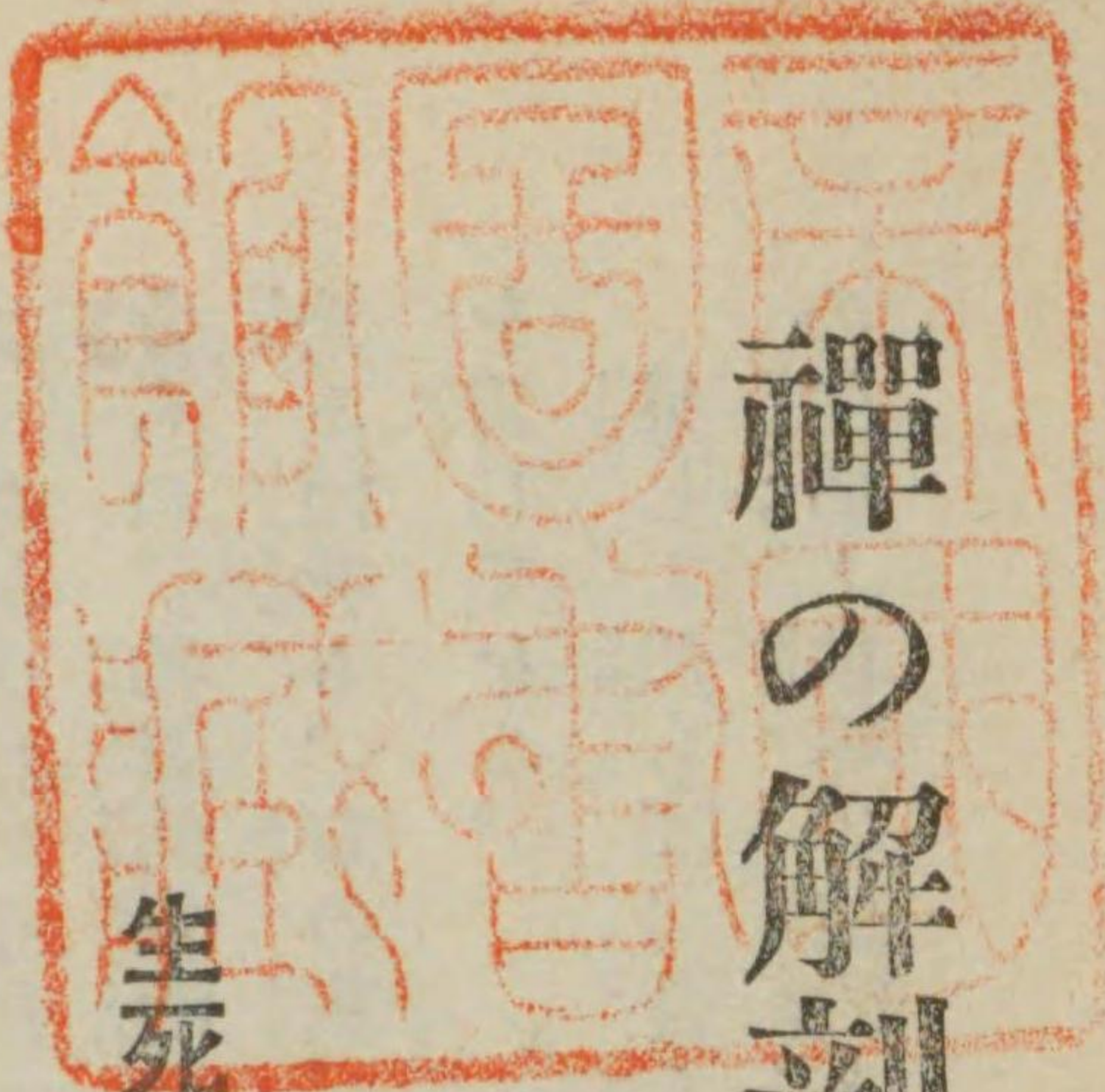
三、啐啄同時

二祖慧可……趙州和尚……娛樂半分では解決出來ぬ……眞劍の修行をせよ……………三三一

無師獨悟……參師問法……五峰……雲巖……僞山……百丈

禪の解剖(肉と血と皮)

釋宗演述



生死は一如なり

一、眞の意義ある生活を

我が大聖釋尊は、物質的生活に於ては、何等の不足もなかつた一國の太子として生まれてゐながら、やがて昇るべき國王の位も、最愛の妻子も、繁履の如く棄て、顧みず、一個の乞食沙門として、大道を求め給うた。抑も、これは何が故であつたらうか。他なし、生死の大問題を解決せんが爲めであつた。

我れくの生活には、物質、亦た、缺くべからざるのであつて、生活資料として

生死は一如なり

の物質は輕視することが出来ないが、併し乍ら、我れは、物質的生活にのみ満足して、精神的生活を閉却することは出来ない。

若し、人があつて、「自分は物質的生活だけで満足である」といふものが有つたならば、衲は、かくの如き人に對して「お前の生活は、そこに幾らか程度の差はあるとしても、牛馬犬猫に等しいものである」と斷言するに憚らない。

人間は、萬物の靈長であると自稱してをるが、それは人間自身の勝手な話であつて、牛馬犬猫は牛馬犬猫で、各、自らを以て、萬物の靈長であるとしてをるかも分らぬ。物質的生活であるならば、彼等禽獸と雖も此れを爲して居る。否な、庭に繁る植物も、春の花、秋の紅葉、その他、微細の塵一本でも、皆な、等しく、これを爲してをる。

果して然らば、吾人が如何に萬物の靈長であると獨り力んでみたところで、吾人の生活と彼等の生活と、何等、選ぶところは無いぢやないか。彼等の生活に比して

吾人の生活が、どれだけ勝る價值と意義とを有して居るであらうか。

併し乍ら、人間には、内面的生活、換言すれば精神的生活があつて、この點が彼等の生活に比し、遙かに價値あり意義ある生活たる所以である。

こゝに衲のいふ精神的生活とは、世間の煩累を避け、世間を白眼視して、山林に遁るゝ如き隱遁生活を指すものではない。かくの如きは、衲のいふ精神的生活とは相反するものであつて、まことに無意義極まる生活である。見よ、釋尊は、生老病死の四苦（約言せば生死の二つ）に深憂を發せられ、奮然、出家して、苦行六年、豁然として大悟せらるゝや、再び、俗世間に歸つて、南船北馬、縦説堅説、三百餘會の説法に寧日なかつたでは無いか。

世界は成住壞空、人間は生老病死、この四つによつて、時々刻々、流轉變化しつゝある。晨の紅顔も夕べには忽ち白骨となる。露の如く亦た電の如し。果敢ないのが現世の状態である。

生死は一如なり

人は、この果敢ない短生涯にあつて、無限の生命と、寂然不動の境界とを擧得し、何等の苦悶なく、常に、歡喜と勇氣とに満ちた精神をもつて、自己の本分を盡くしてゆく、そこに精神的な生活が顯現し、人間生活の眞の意義を味はふことが出来るのである。

二、吾人は大生命の一部分

扱て、吾人が「生」といふのは何を意味するものであらう。吾人の生命が即ち生である。一般世間の見解では、「母の胎内から出で、此世の光に浴した時に始まり、棺に收つて地下に入るに終る。」その間をいふのであるが、納共に於ては、そんな果敢ない生命をもつて生命とはしない。佛教の説くところに依ると、吾人の生命は、無限であり、無窮である、無始劫來から盡未來際に至つて、永久無限に相續する。無始無終、一もつて貫き、千態萬狀の中に自己を認める、これが吾人の生命である。

我れ／＼が朝から晩まで、終日、一生懸命に活動して、夜、歸つて、疲れを休める。翌朝は、更らに勇氣を盛り返して、又た一生懸命の活動をする。かくの如く、毎日繰返して活動をする。これが生命の力である。

かくの如く觀察したならば、宇宙間の森羅萬象は、悉く、生命の變態である。峨々として聳ゆる山、洋々として湛える海水、死物の如き岩石、翠綠滴る青葉、空飛ぶ鳥、水に泳ぐ魚、それ等が、すべて、その儘、自己の生命であつて、從晝至夜、間斷なく活動してをるのである。

して見ると、この宇宙間は、統一あり、秩序ある、連鎖の如き、網の目の如き、始めの端緒を見出し得ざると共に、終りの極處も見出し得ざる、一つの大生命の窮まりなき連續である。吾人々類は、此の大生命の一部分として、現在、此處に此のやうな相をして現はれてをるのである。

生死は一如なり

生死は一如なり

だから、此れが生である、此れが死であると云ふものは、決して、無いのである。生死は全く一如である。これを生と名くるならば生でもよいが、死と名づくるならば死でもよいのである。生と名づけるならば、どこまでも生の一つであつて、死といふものは無いのである。死と名づけるならば、どこまでも死の一つであつて、生といふものは無いのである。

如何なる宗教でも、また、如何なる哲學でも、此の端的を、確乎、我がものとして體得しておかなければ、決して眞箇の大安心は得られるもので無い。

三、慧玄が這裏に生死なし

昔、漸源が師匠の道吾和尚のお伴をして或家へ葬式に行つた。其時、漸源が棺を叩いて、
「生が死か」

と問ひを發した。道吾和尚は、

「生とも道はず、死とも道はず」

と云はれた。生だの死だのと言へば、もう好肉上に瘡をつける。それが、漸源には分らぬので、葬式が済んで歸る途中、漸源は、どうしても師匠に其れを言はせようと氣を苛立て、

「道はすんば和尚を打たん」

と詰め寄つたが、和尚は、

「打つことは即ち打つに任す、道ふことは即ち道はず」

と云つて、何んとしても應ぜない。何か或るものが有つて、それを隠して殊更らに云はないのでは無い。漸源は、とうとう師匠の頭をポカリと打つたが、遂ひに和尚は云はなかつた。

其後、漸源は、石霜和尚のところへ行つて、前の問答を繰り返して、

生死は一如なり

生死は一如なり

「生か死か」

と訊ねたが、石霜和尚も矢張り

「生とも道はず、死とも亦た道はず」

と同じことを答へられた。そこで、

「何んとしてか道はざる」

と詰ると、これ、また、

「道はずく」

と答へられた。これを聞いて、始めて、漸源は、大悟したと云ふことである。

また、一僧があつて、關山國師に向つて、

「生死事大無常迅速、請ふ道へ」

此世は無常迅速であつて、生死のことは一大事である、どうか教へを垂れて下さいと云ふと、國師は、

「慧玄が這裏に生死なし」

と云つて、打つてく打ちのめし、とうく遂ひ出してしまはれた。此僧も、こゝで氣が注いだであらうよ。

四、深草の閑居夜雨の聲

人は生まれたからと云つて、今まで無かつたものが新たに出來たのでもなければ死んだからと云つて、今まで有つたものが急に無くなつたのでも無い。生死は瞬間の閃きに過ぎない。ピカツと電光が閃いたやうなもので、生じたのでもなく、無くしたのでもない。

各人は、種々様々の煩惱妄想を、自分の腹の中に詰め込んでをつて、人生五十だの、七十古來稀れなりだの、朝露の如しだの、夜半に嵐の吹かぬものかはなど、まことに取り越し苦勞をしてゐるが、人は力の續く限り活動して死ねば其れで本望で

生死は一如なり

ある、何も取り越し苦勞して色々と考へる必要は無いのである。

如何に病魔に苦しめられても、如何に自由を奪はれても、自分の活動を續けて行くことさへ出來たならば、それは大自由であり大安心である。元來、生だとか死だとか云つて、深く考へ悩むべきものは無いのである。

が、かやうに、生死は無いぞと、上から幾ら抑へつけても、下からくと絶間なく生死が頭をもたげる。生死はないぞと理窟で會得しても、到底駄目である。生死のない境界に、自分の心を鍛錬して至らなければならぬ。つまり、大悟徹底しなければならぬ。

大悟徹底といつても、前に述べた漸源や關山國師の如き場合のみに限つたことでは無い。淨土眞宗ならば、他力的に、

「無南阿彌陀佛」

に成り切り、法華宗ならば、妙力的に、

「南無妙法蓮華經」

に成り切つてしまつた時、生が何處にあり、死が何處にあるか。共に一行三昧である。この境界に至れば、生だとか死だとか云つて、目にチラ附くものは無い。生が行きの道ならば、死は歸りの道である。道元禪師の偈に、

生死可憐雲變更 迷途覺路夢中行

只止一事醒猶記 深草閑居夜雨聲

といふのがあるが、今ま、道元禪師の偈をもつて説けば、「生死憐む可し雲の變更」で、胸中に、何等、生死の滯ほるものが無い、生死を見ることが浮雲の往來を見るが如くである。「迷途覺路夢中行」で、相對的に觀たならば、生も死も、悟りも迷ひも、有るには有るが、皆な手枕一睡の夢である。醒め來れば何物の存するものがない。さて、かやうに、生死を透脱した境界は、「只だ一事を止めて醒めて猶ほ記す」で、悟つた身にも雨の降る日は雨の音が聞こえる。即ち、「深草の閑居夜

雨の聲」で、静かな深草の閑居に、夜更けて雨垂れの音のポトリ／＼と落ちてくるのを聞いて居る。そこに、生ありや、死ありや。雨垂れの音を聞け、雨垂れの音を聞けである。

人は、此の生死の大問題さへ解決をしたならば、世間の有らゆる一切の事、過去を思うて悲しむべきことも無く、未來を案じて憂ふべきことも無く、現在の苦悶を訴ふることも無い。常に、安穩に平和に、活潑々地の活動をなして行くことが出来るのである。

信の一字

一、寂寥たる精神界

老衲は、茲に、信の一字について御話したいと思ふ。老衲が曾て足を海外に踏み出して行脚した際、先づ注目せられたものは、學校と寺院とであつた。大都市は勿論、小かなる町村に於てすらも、巍峨たるものは寺院の殿堂、立派なるものは學校、く舎であつた。而して、足をば家庭内に運ぶと、多數の家庭には、何れも、一の樂器と一卷の聖書とが備へられてゐた。是に於てか、一つの感想が起つた。即ち、彼國では、政治、教育の外に、宗教の氣分が漂うてゐると云ふことである。彼國の人は、政治家も、教育家も、實業家も、労働者も、皆な何れも多少に拘らず宗教的興味を有つてゐる。

然るに、我國にては、斯くの如く、社會の内容根柢に於て、宗教的氣分が漂うては居らぬ。政治家は政治を語り、宗教家は宗教を口にし、實業家は經濟を云々するけれども、我れは政治家なるが故に、我れは教育家・實業家なるが故に、宗教のことは關係せぬといふ體の人が多數である。曾て、米國のブライアン氏が、日本漫遊の歸國後、語つて曰く、

「日本に於て、各種の階級の人々と相會し、政治、經濟、法律、商業等の意見を交換した。併し、毫も、宗教に關する意見を耳にせざりしを遺憾とす。日本國民は、斯く宗教を無にして、社會の道德を維持し得るのであらうか、解する能はず」

と批評して居る。思ふに、教育と宗教と此の兩者は大いに相提携せなければならぬもので、此事は今更ら云ふまでも無いことである。云ふのは已に時勢後れの感がある。兎に角、宗教家と教育家は、精神的に相一致して、世運の進歩を助けなければ

ならぬ。然るに、時としては、教育と宗教とは全然背馳し、相ひ併び立たぬ如く考へる者さへある。是くの如きは、如何に物質的に進歩著しと雖も、精神界は誠に寂寥たるものである。

二、信とは何ぞや

扱て、信は、今更ら解釋するまでもない。されど、信とは何ぞやと各個人に尋ねたならば、如何あらう。神佛にお祈りすることなりと、かう云ふと、世の中には、我れは神佛に祈るほど老耄れては居ないと答ふる人もあらうが、信とは眞實伴りなき心である。本心眞心である。之れを佛心佛性と云つてもよい。明治天皇の御製に、

目に見えぬ神にむかひて慚ぢざるは

人の心のまことなりけり

と仰せられてある。まことに、恐れ多い御教訓であつて、我れは、恭けなく拜載して居る。

凡そ、信の一字は、神にも通じ、佛にも通ずる。これ有るが爲めに、國家社會は安らげ、世界は平和である。淺草の觀音様に參詣して、多くの人々が佛前に祈りを捧げてゐる状を目撃すると、一種の感懐が催される。これを、一口に、迷信なり、妄信なりと難する人もある。勿論、その祈るところは、家内安全、息災延命、病氣平癒、所願成就と、いろいろ雑多であらう。併し、其の願ふと云ふ其心は、絶對的の信心である。人と人との間に於ける信とは、何れも相對的のもので、絶對的のものでは無い。父母、兄弟、朋友、皆な相對的の信である。此等の間には、皆な、何れも、我執が爲の邪念が存する。朋友と雖も、互ひに信ずる程度は絶對的では無い。然るに、神佛に對して祈る一念は、毫も偽りがなく、天真流露、全心全身を捧げてゐる。即ち、絶對である。これを迷妄として一笑に附し去るが如きは心なきことである。

淺草の觀音を拜むを見て、或者は、これを偶像崇拜なりとして、これを笑ひ、これを迷信妄信なりとして斥けるかも知れぬ。されど、かく排斥する當人も、既に一種の偶像崇拜者であることを知らぬのである。其の偶像は虛名といふ偶像、利慾といふ偶像、かゝる偶像を懸念に崇拜してゐる者である。滔々たる天下、悉く、名聞の偶像を拜してゐる。豈に獨り下級の宗教のみを、偶像崇拜なり、迷信妄信なりとして、一笑に附することが出來得るものか。

信ずるといふ其の眞心の顯はれは、之れ、眞正なる心の表現である。信心は火に入つても焼けず、水に入つても溺れずといふ堅實強固なるところに存する。社會が平和に維持せられて行くのは、學問上に於ける智力の競争、軍備の競争が原因をなすのでは無く、共心戮力、能く種々の異分子が相集りて共同生活を保つところに存する。而して、其の平和を維持する眞原因は、之れ、眞心の發露に因由するの

である。この心が轉じて、博愛となり、慈悲となり、一切の道徳となる。

かく相對的の信にしても、尙ほ、其の偉なる事は斯くの如しである。然るに、衲どももの云ふ信は、無限に通ずる信仰、絶對に通ずる信仰であつて、佛と凡夫と一如する信仰である。勿論、人と人との間の信も尊むべきものであるが、必ずや、ある限界がある。昔、曾參は、母子互に深く相信じてゐた。或時、人あり、母の許に到り告げて曰く、「曾參、人を殺せり」と。されど我が子を信ずることの深き其の母は、毫も之れを信ぜず、「我子は決して斯くの如き惡事を働く者にあらず」と云つて、之を斥けて顧みなかつた。然るに、其母に告ぐることに三度に及んで、始めて、稍や心を動かし、其事なきかを疑つたとある。曾參母子の間に於てすら是くの如くであることを思ひ見れば、相對的の信は、或る程度に達する時は、其信の極度、限度に達して、信は消え失せるものである。セークスピアの劇中のオセロは、其妻を信じて毫も疑はざりしも、他の離間中傷、屢ば至るに従つて、漸時、疑心を生じ、

遂ひに其の讒言を信するに至つて、美しい妻を毒刃に屠つたが、後、其の真相を知つて悔悟の情に堪へず。遂ひに自らも相果てしまつたと云ふ悲劇もある。

かく相對的の信、親子、夫婦、兄弟、朋友間の信は、ある限度に達すれば、破壊せられる。道徳的信念は、ある程度までを保つけれども、決して、永久不變では無い。或人は、俺れは盗みもせぬ、放火もせぬから、これで宜からう。と、昂然たるものもあり。併し乍ら、我等の生命が、單に、母胎から出て棺に入るまでの一期であり、また、人類のみを世界と見れば、それにて宜しいかも知れぬが、此の道義は人と人との間よりほかに適用されない。過去・現在・未來に及ぼす三世一貫の力はない。之れに反して、宗教は、有らゆるものに通ずる。宗教は人にして神に通ずる、信は大慈大悲の心である。此の偽りなき心が神佛に交融するものである。明治天皇の御製「目に見えぬ神に向ひて恥ぢざるは人の心のまことなりなり」と云ふのは、此處の事である。偽りのなき心が、神明に通ずると云ふ明治天皇の御製を拜し奉るの

である。

三、美花は汚土に生ず

かくの如く、絶對的信仰の基本からして、この現實世界が、理想化、即ち、娑婆即
 寂光淨土といふ信仰の大光明の状態が顯はれる。信するの一念存すれば、此の
 娑婆が寂光淨土といふことが出来る。この心あるが故に、煩惱ながらに道心にな
 り、鐵を變じて黄金となし得る。煩惱即菩提、煩惱を菩提の種とすることが出来る。
 田の草を採つて其儘に其れを肥料にすることが出来る。佛教上の言葉で、悟りとか、
 大安心とか、大立命とか云ふのであるが、凡そ活きたる信仰の眼を開いて見ると、
 こゝに煩惱即菩提の光明を認められる美しい花は、乾きたる土地には生えない、
 汚土の圃中から花も咲き、實も育つ。
 水に譬へて「信」を詠ぜられた古徳の偈がある。

菩薩清凉月

畢竟現於空

衆生心水清

菩提影中現

といふのである。水か、月か、一つにして二つ、二つにして一つ、一とも言へず、
 二ともつかず、佛心を此方に受け取れば、信の一字に外ならぬ。尙ほ、深刻に言へ
 ば、月影は濁つてゐる水にも、清き水にも、同様に宿つてゐる。月影は、泥水にも、
 如何なる水にも映る。佛の心は、罪ある者にも、如何なる者にも、其影を宿すので
 ある。古人の歌に、

世の中に悪しと思ふものぞなき

罪ある身こそ猶ほあはれなる

濁りたる水にも影をやどすかな

月のこゝろの廣澤の池

といふのが、此の心持ちを能く現はして居る。商工道德の上から見ると、我

國の忠とか孝とかは徹底してゐるが、胡魔化しがあると思ふ。舊道徳は狭いと思はれる。忠孝を傷けてゐるものが有る。即ち、忠孝の美德を有する人にして、商業上の不徳などを省みない者がある、決して、忠孝を傷けようとするのでは無いが、深く考へぬから斯ういふことになるのである。

社會問題は今後の問題である。謂ゆる權利義務の觀念が盛んになり、貧富の懸隔が甚しくなり、地主對小作人、資本對勞働者等の難問題が續出しようが、今日は學問も智識も普及的になつて來た、社會的に進んで來た、心持ちの異なつた多數の人が一所になつてゐると難しくなる。この間に於て、如何にして社會の平和を保つかと云ふに、之れ、唯だ、宗教的情操を以てするより外はない。この信が同情心ともなり、慈悲心ともなる。この信があつて、家庭の平和も保たれ、社會の平和も維持せられる。かく宗教的情操が社會に遍滿すれば、社會の心となつて、各方面の各事業は活躍して社會の幸福を受くることが出来る。

人生は大夢なり

一、五蘊の所成の身

「佛曰はく、阿難よ、想蘊盡きる者は、此人、平生、夢想消滅して、而も寤寐恒一なり。」

と楞嚴經の中にある。想蘊といふのは、五蘊の一つであつて、五蘊といふのは、色蘊、受蘊、想蘊、行蘊、識蘊の五つである。蘊は、積聚の義で、色蘊といふのは、一切の質礙あるもの、總様である。分り易く云ふと、物質のことである。次ぎに、受蘊は、外界から受ける感觸で、即ち、外界からものを受取る心の働きである。それから想蘊は、一口に云ふと、想像である。行蘊は、遷流の義で、水の遷り流るゝが如くに、それから其れへと絶えず移行行く心の働きである。識蘊は、意識の中に

溜め込むといつたやうなものである。

世間の人は、常に、夢の世の中とか、夢の浮世とか云つて居るが、まことに、人生は一夢である。吾人の身體は、五蘊が假りに和合したものであつて、定まれる相なく、無自性不可得である。だから、「皆空」といふ。般若心經に、

「觀自在菩薩、深般若波羅密多を行ずる時、五蘊皆空なりと照見す」

とある。重ねて云ふが、吾人の身體は、五蘊が、一時、假りに、因縁によつて和合して成立したもので、此五蘊は、畢竟、空なものである。我れが俺れがと執着して見たところで、人生五十が通り相場で、人生七十は、古來、稀れなりと云はれて居る。況んや百年の壽命をや。

故に、古人は、「人生大夢の如し」と云つて居る。全く大きな夢を見て暮すやうなものだ。

二、洒々落々たれ

扱て、世間の人のいふ謂ゆる夢とは、人々が寢て居る間に起る頭腦の作用を稱するに外ならぬが、併し、此の世の現實が總て夢である。朝、臥床を出で、晩、臥床に入るまで、怒り、泣き、笑ひ、苦しんだり、悲しんだり、楽しんだりする、是等が悉く夢である。

ところで、吾人は、此の苦しい悲しい辛い現實の夢に際會しても、決して、悲觀的であつてはならぬ。失望的、引つ込み思案的では不可ない。大いに樂觀的、積極的、進取的に、楽しく愉快に活動しなければならぬ。それが出来ないのは、物に執着するからである。物に執着するが故に、物に囚はれて自由の分を失ふのである。その時々に応じて、一點の囚はれる所なく、洒々落々として、恰も、天馬の空を往くが如き境界、これが即ち、大乘佛教の悟りの境界である。

道元禪師の御歌と覺えて居るが、

人生は大夢なり

水鳥の行くも歸るも跡たえて

されども道は忘れざりけり

といふのがある。此の御歌を能く味つて貰ひたい。人、若し、一點の囚はれるところが無かつたならば、丁度、鳥の空中を翔るが如く、魚の水中を泳ぐが如く、サラ／＼として居つて、少しも痕跡を残さぬ。彼の水鳥が、縦横に水上を往來して、些かも痕跡を残さざるのみか、決して、道を踏み外すことの無いのと同じである。

三、樂み春の如し

昔者、莊子が、夢に胡蝶となつたと云ふことがあるが、思ふに、これは、胡蝶が分相應に働いて居つて、翩々と心の欲するまゝに飛び楽しむといふ寓意であつて、餘程輕快のことと思ふ。

世は、大夢である。併し、我れ／＼の見るのは小夢である。歐洲の戦争、これも夢であつた。世界の太平も、亦た、夢である。歩一步、夢を進めて行くなれば、其の樂みは洋々として、春の如くである。

大般若の疏に「久しく金剛不壞の壽命を持して福慧を増長し」といふことがある。金剛は、寶石の名で、堅と利と明の三義を含んで居る。即ち、金剛石は、非常に堅固なもので、何物も此れを破壊することが出来ない。又た、非常に銳利なものであつて、何物も此れを截斷することが出来ない。又た、寶珠の王と稱せられるだけあつて、其の光明は能く闇夜を照し得るのである。だから、佛身を譬へて、金剛不壞の身といふのである。涅槃經にも、「我れ護法の故に金剛身を得たり」といふ語がある。金剛身、即ち、身心の平安を得て、外境の爲めに動搖されることなき身であつたならば、現實の如何なる惡夢も何かあらんである。前にあつた楞嚴經の、

人生は大夢なり

六

「此人、平生、夢想消滅して、而も寤寐恒一なり」
で、平生、夢想消滅して、さうして、寝ても覺めても恒一で、常に、同じ境界に居る、これが悟つた人の境界である。禪家の修行は、此の境界に到るの修行だ。

無邊の風月

一、詩の味はふ可き點

無邊、風月眼中眼、不盡、乾坤燈外燈、柳暗花明十萬戶

叩門處々有二人、譬一

今回は、茲に掲げた此の七言絶句について御話をしよう。此詩は、我が禪門では有名なものである。衲も、幼時から、始終、教へられて居たし、又た常に耳にしてゐたので、實は、最う、其の意味ぐらゐは會得して居らなければならぬが、其の眞意の妙味に至つては、なか／＼分るものではない。

大體、此の「詩」といふものは、禪門では、極く關係の深いものとしてあつて、詩即禪、禪即詩といふ、謂ゆる詩禪一味といふ言葉さへあるのである。それだから

言語の及ばざるところ、是れ詩なりで、云ひつくせぬ妙處に到つては、唯だ詩によつて其れを味はうて行かねばならぬ。兎に角、詩は吟ず可くして語るべからず、獨り之れを吟じて居る間に、自然と其の妙處が出て來るのである。

吾が禪の方では「興奪」と云ふ言葉を用ひる。即ち、興へて云ふ時と、奪つて云ふ時とであつて、今ま之れを奪つて云ふ時は、「一法として人に興ふる無し」で、お釋迦さまも、横説堅説、西に東に三百餘會を重ね、五千四十餘卷の經文を御説法になつたが、揚句の果ては、「一字不説」とまで云はれた。即ち、

「吾四十九年住世未三會説一字」

兎の毛一本、塵一片も説いたことは無いと云はれたが、併し、之れを興へて云ふ時は、天地すべての現象、一切萬物、悉く、禪宗の藥籠中に歸すと云つて差支へない。指一本の中にも、八萬四千の法門がチャンと存してゐると斯う云ふ。併し、此んな事は、それ／＼の眺めやう一つである。世間の事々物々は皆な相對

的なんだから、上があれば下、裏があれば表、と云つた有様である。換言すると、言語、文字ならば、末の未なるもので、吾れ／＼の思想や才能は、其の極致に到らば、用ふるに由なく、唯だ「アツ」と云ふ其處に落在してしまふ。それだから、何事に依らず、その「アツ」といふ所に到つては、昔話ぢやないが、芭蕉の

松島や、あゝ松島や、松島や

に外ならぬのである。極致、眞理に至つては、何うの斯うのと解釋したり、勿論、文筆の暇はない。松島は唯だ松島で、「ア、」の妙處は、實地に見たものでなければ知り得ることは出來ない。こゝを古人は「冷暖自知せよ」と云はれてある。

何んでも第二人者になつては、決して、其の味は分らない。當人自身が直覺的單刀直入的に行かなければ不可ん。それであるから絶對無限界に至つては、論理も理窟も盡きてしまふ。唯だ黙るより仕方がない。尤も、昔は、維摩居士のやうに黙つた人もあつたが、黙つてしまつては、又た之れ分らぬことになる。

此の言ひ難い妙處をあらはしたのが、歌や詩であつて、山の青々たる、花の美麗なる鳥の樹間に囀るなど、自然の風光は、理窟や説明では、到底、駄目である。そこに詩が生まれる、歌が生まれる。詩や歌の如何に妙なるか分るであらう。彼の宋朝時代に出た有名なる蘇東坡が、

溪聲即是廣長舌 山色豈非清淨身 夜來八萬四千偈

他時如何舉似人

と詠じたことも能く考へてみると、實に幽玄にして、且つ、深く自然の眞理を穿つて居る。

廣長舌は、一に長廣舌としてあるが、今はそんなことは何方でもよい。兎に角、佛説法の巧みな事を意味したものである。溪聲は、恰も佛さまが長い舌べろを以て滔々と一大説法せられるかの如き感があると云ふのである。こゝで、ちよつと、思ひ出したが、佛さまの舌べろは其長さ頂上に達すとあつて、ズーツと鼻頭

から額を過ぎて、頭の頂點まで伸びたと云ふが、若し、今ま、そんな舌を持つてゐたら、直ぐに化物視せられるであらう。併し、之れも、唯だ、佛さまの横説堅説、自由自在な其の辯舌の卓越なることを意味し形容したものに違ひない。

かう云ふ風であるから、山色の風光も、見れば見るほど、光明赫々たる清淨身、即ち、三十三身に現する佛菩薩の淨き御姿の如くであると云はんばかり、水の音を聞くにつけても如來説法の妙音、山色の千態なるを見れば、又た佛身の三十三處に現する其の神通無礙なる法身に、何れも親しく接するが如き感あらしむるのは詩の味はふべき點なのである。

それゆゑ、俳句であらうが、和歌であらうが、其の妙處に至らば、禪の境と略ぼ一致のところがある。否な、兩境密々たる關係のあることは言を俟たない。禪に於ける商量といひ、それ〴〵の偈頌といひ、言語不到のところを意味させるのだから、なか〴〵分らないのが多い。あまり餘談に移つたが、唯今、茲に掲げた詩を

今ま云ふた「心の極致」、少し六ヶ敷いかも知れぬが、その今まの眞理を詠じたところから見れば、實に甚深微妙なる味ひがある。

二、肉眼ばかりでは見えぬ

扱て、第一句は、「無邊の風月、眼中の眼」、これは、何も、風とか月とかに限つてしまはいでも宜しい。一切萬物、山川草木、森羅萬象と見たら宜い。無邊の萬物を見るに、決して、肉眼ばかりでは見えぬ。世間の多くは直ちに五感の眼をあてにして見る。物質的文明の進歩した今日は、遠くを見るに望遠鏡、微きを見るに顯微鏡とか何んとか云ふけれども、是れは一つの程度までだ。その間に障害があつたり、遠きも微かきも其度以上になれば見ることは出来ぬ。文明のやうでも、茲に到れば役に立たぬことになる。

又た科學に於ける實驗も、結構は結構だが、唯だ、五感、即ち、眼・耳・鼻・舌・身



を胸れては出来ぬので、科學者そのものに云はすれば、「發達せる學理、進歩せる機械に依つた實驗以外の、つまり眼に見えず、耳に聞こえぬところには、何んの眞理も秘在しては居らぬ。勿論、神や佛などと云ふものは有るもんぢやない。」

など 傲語するだらうが、こゝは、餘程、考へねばならぬところである。哲學などでも然うだ。理の不及點、不可知點に至らば、唯だ聾の如く、啞の如くである。どうして、そこに宇宙の眞理を徹見したと云はれやうか。

五感の眼、物質を眺むる眼は、唯だ其の表面的の觀察に過ぎぬ。其の眞理、換言せば、森羅萬象の形なきところ、其の絶對無限なるところに至つては、肉眼の及ぶところでは無い。その幽玄不及のところを見る「眼中の眼」は、吾が禪門の謂ゆる心眼とでも云はうか。精神的マナコで見なければ見ること能はずである。

眼についても、天眼通といふものがある。これは、やつぱり、天耳通とか、宿命

通とか、今まの神通妙用の意味から来たものである。その外に、慧眼ともいひ、此頃流行する千里眼といふものも、其の方面の天眼通、即ち、心眼なのである。敢て禪門の修行をして悟道せずとも、それ／＼専門／＼の眼を透さば何んでも分つてくる。

吾が宗教、禪門の立脚地から、一切を見るとき……少し是れは極言かも知れぬが……吾が目前に、天堂、地獄、有らゆる魔界、佛界が現はれてくるやうに見受けられる。

その靈なる働きは、哲理、科學の論ではない。古人の語に、

「巢知風、穴知雨」

と云ふのがある。即ち、鳥や蟲の類に至つても、此の不可思議なる神通妙用は自在なのである。

臺灣とか、小笠原とかいふ名は知らねども、は、ア何の邊に低氣壓が起つた、

何日頃、颶風がやつて來ると、自然に鳥には分るから、早速、巢を別處に運んで、安全を計る。又た、如何なる大雨が降つてくるにしても、穴に居を構へてをる蟻は、七日前からチャントそれを知つて、豫め相當の防禦準備をすると云ふ有様だ。

其他、自然界を眺めて見ると、有らゆるものが、自然の妙靈によつて支配され、不可思議な働きを現はしてをる。茲に至つては、到底、理窟や學問の遠く及ばぬところである。彼の千里眼とか、透視術なども、共に、不可思議な術で、やはり、理外の理から割り出された一種の神通に相違ない。

世間のことも、唯だ單に五感をのみ當てにするので無く、もう一步進んだ謂ゆる眼中の眼、即ち、心眼によつて、一つ大發見がありさうなものだと思ふ。勿論、禪そのもの、立場に至つては、彼れ是れ論ずるの暇はないが、あまりに今の世が、哲學と云ひ、科學と云ひ、其他、何れも、物質化し過ぎた表面的學問にのみ拘んで、此の天地の大眞理を、精神的に、徹底的に、自覺すると云ふことに缺けてをる。此

點は、社會の各階級を通じて、一段、進んだ省察を促す必要があると思ふ。

三、心を中心としての問題

これも一つ思ひ浮んだから云ふて見よう。有名な山岡鐵舟の門下で、當時、名聲を上げた落語家三遊亭圓朝が、常に、十八番として演じた話がある。見やうに依つては實に面白い。落語的に云へば、一層に興味もあらうけれども、衲には、ちよつと、その眞似が出来ない。題は「心の眼」と云ふて、なか／＼面白く仕組んである。

茲に夫婦者があつて、亭主の方は未だ結婚せぬ先きから目が見えない。本來から云へば、今度、貫つた女房の顔が、どんなのか分らないのだけれども、そこが妙なもんで、亭主自身には非常に別嬪に見えた。見えたといふのが「心の眼」なんで、肉眼は、兩方とも、まるで駄目なんだ。しかし、まあ、明け暮れ一緒に暮らしてゐる。

女房が、如何にも美しい女で、その容姿といひ、頭の具合といひ、殆んど眼で見ると、見るやうな心地で自ら愛してゐた。

一方、女房は、丁度、「壺阪」のお里みたやうに、盲目の亭主を大事にして、方々の醫者の手にかけてたり、又た、神や佛に祈願をこめ、遂ひに、その加護によつて、うれしや兩眼とも開いた。元の眼になつた。一時は二人して喜んだものゝ、一旦、眼が開いて見れば、今まで別嬪と思つた自分の女房は不別嬪……不の字がおかしいな……鼻は曲つて、おまけに低い。口は大きく、色は黒い。頭の髪は亂れて居るといふ有様である。亭主は、眼が開いたばかりに、此の女房が忽ち嫌やになつた。そして、遂ひに、離縁沙汰となつた。

これを落語家に云はせると、面白いのだが、まあ話の筋は斯ういふ風である。……話すうちにヒョイ／＼胸に浮ぶんだが、これは横濱の或る處で、祝壽の式があつて、その餘興に、延壽太夫の清元があつた。恰も、「夕霧伊左衛門」をやつたが、其

の延壽太夫が謠ひ出す聲の中には、如何にも伊左衛門が動いてゐるやうにも思はれるし、その着衣の具合ひから、手足の舞ひがはつきり眼に見えるやうな氣がした。やはり、かう云ふところに、眞の妙味と云ふものが存在してゐるので、理窟や學說などでは、とても其の味は出ない。謂ゆる延壽太夫の如きは、其の藝に超越してゐると云ふても宜い。それだから、今の科學や哲學も、超科學、超哲學といふやうに、之れを心から會得する一步進んだものにしたたい。

ワットの蒸氣汽罐の發明や、ニュートンの引力發見を見ても、この超科學、超哲學の發現に外ならない。云はゞ吾が禪宗に於ける豁然大悟、謂ゆる大死一番の境と大なり小なり事は違つても、其の眞理にいたつては大した差は無からうかと思ふ。佛が、麻麥の苦行をせられて、雪山十二年後の大悟は、遂ひに、

「奇なる哉、一切衆生は、如來の智慧徳相を具有す」

と呼ばしめた。即ち、山川草木悉皆成佛の眞理を發見せられた。古徳祖師方でも、

或ひは桃の花の開くを見て豁然大悟せられ、鷄鳴を聽いて其の佛陀の光明を放たれたお方もある。之れ、皆な、「心」を中心としての問題に外ならぬのであつて、「無邊の風月」も、唯だ平凡の眼には、何んの價値もないが、謂ゆる悟つた眼とでも云はうか、「眼中の眼」によつて眺めたなら、必ず、「無邊の風月」——此の妙味が分るのである。

四、此處が謂ゆる宇宙の生命

次ぎの句が又た面白い、「不盡の乾坤燈外の燈」、乾坤といふのは宇宙といふも同じこと、前句に對して云つたまでのことで、茲には空間的、時間的にあらはれてあつて、宇宙その物から云へば、盡くること無しである。三世を通じて、現在はや過去になり、未來は又た現在になつて轉々として盡くることなし。吾れく人間ばかりでなく、世の一切萬物悉く生死輪廻をやつて居る。死んだと思ふと生まれる。

まるで、井戸車の日夜回轉して尙ほ元との如し……と同じことぢや。

これを物にたとへても然うさ、塵一片でも是れがなくなることは無い。それや、形は變り、場所は異つても、其物たるや、萬世、古今、滅することもなければ、生ずることもない。絶對眞理に至つては、此處まで見抜かねばならぬ。

この盡くることなき不變の眞理、始めもなく終りもなく不生不滅のところ、直きに其のまゝ、春に百花あり、秋に月あり、夏に涼風あり、冬に白雪ありで、こゝが謂ゆる宇宙の生命とも云ふべきである。

此中にあつて、人生五十と説き、七十と説き、生を喜び、死を悲むとは、何んぞ其れ愚なるの甚しきやだ。宇宙の生命が同時に吾が生命と知らば、生死ありとて又た敢て悲喜することも無い。否や、生死の沙汰は無いのである。

次に「燈外の燈」とは、光明赫々たる眞理の燈火である。物質的燈火は、時あつて生滅するけれども、絶對眞理の燈火にあつては、謂はゆる燈外の燈で、縦三

才を貫き、横十方に廣がりわたつて、隅なく照りかゞやいてある。

五、何くも同じ秋の夕暮

第三句目に移るんだが、もう之れからは、前の二句を受けて分り易き形容に止まるのである。「柳暗花明十萬戸」。十萬戸といふのも、別段、十萬と定つたわけのものでは無い。唯だ廣い世界を指したもので、何處も彼處もとの意味である。

「見渡せば、何くも同じ秋の夕暮」

か、

「柳櫻をこきまぜて、都ぞ春の錦なりけり」

で、どこもかしこも秋になれば紅葉の錦、春になれば、柳は緑を、花は紅を競ふ有様。自ら天地自然の情趣を感得することが出来るのである。昔も今も、柳は緑り、花は紅るで、而も春風駘蕩、少しも變つたところは無い。前句に云つた「眼中

の眼」で、眺めたところでは斯れなんである。

茲に至つては、悲觀もなければ樂觀もない。次ぎから次ぎへ、ズン／＼と轉々して行きをる。丁度、東海道五十三次のやうぢや。人生五十とか七十とか云つて居るが、畢竟、之れなんで、「眼中の眼」をもつて「燈外の燈」に照らして見れば、「日々是れ好日」で、各自、その天職本分を盡くして行くならば、いつも春風駘蕩、感謝の念に溢れるであらう。

是れが宗教の信念とでも云はうか、實に難有いところなんである。世の中の人、此頃の若い者は、「アリガタヤ」なんて、此の信仰厚き人々を笑ふけれども、爺さん、婆さんが、一心不亂に念佛三昧を修して、南無阿彌陀佛／＼と念佛を唱へて居る其の有様は、真に無邪氣だ。真から愉快だ。其人の年輩、其人の學力など、いろいろの差はあらうけれども、つまるところは、茲だ。何も變つたことは無い。

六、瑞巖和尚の自問自答

結局に至つて、今までの意味を總括して居る。即ち、門を叩けば處々人の答ふるあり」で、何も神や佛にたづねるまでも無い、吾れ、即ち、神にも佛にも變らぬ精神を具して居る。だから、自ら自身に就いて尋ねたら宜しい。外に向つて此の法をたづねんでも、内に向つてウソと承知すれば、それで可いといふまでのことに歸する。

それであるから、自分自身の心に向つて、如何に／＼と尋ねて已まなかつたならば、自ら、「無邊風月眼中眼、不盡乾坤燈外燈、柳暗花明十萬戶」の其の面白味が分つて來るのである。

また、こゝに、思ひ出したが、瑞巖和尚と云へば、禪門に於ては、實に有名な和尚である。此の和尚は、平生、自身に向つて、

「主人公」

と呼びかけ、また、自ら、

「諾」

ハイと答へ、重ねて、

「惺々着」

ハツキリ醒めて居るかと思ね、また、自ら、

「諾」

ハイ醒めて居りますと答へ、更らに、

「他時異日、人の瞞を受くる莫れ」

と警めておいて、また、

「諾々」

ハイ〜と答へて點頭されたといふことである。即ち、一人、磐石上に坐して、

終日、愚の如く静坐工夫をせられ乍ら、かくも自問自答してをられたのである。

そして「惺々」とは、もう徹底的にハツキリと醒めたやうに、能く萬象を照すが如くなる境界である。「着」は唯だ「惺々」の意味を強める爲めに使つたので、謂ゆる、自己も、主人公も、茲に至つては、共に惺々である。唯だ一つである。こゝに至らば、天地法界、惺々着である。而して、他を謾し、自らを謾する兩般もなければ、他の人の瞞を受くることも無いのである。

醒めて居るか何うか、主人公は居るか、といふやうに始終心そのものに氣をつけて修養をつゞけて行つたならば、何時なん時、主人公と呼んでも、「諾々」と云ひ得ることが出来る。

内に向つて尋ねることに於ては、茲に何んの理窟も何もさうはさむ餘地はない。天地一乾坤、唯だ主人公あつて他に何にも無い。その主人公は、自ら「諾」と答ふるではないか。「門を叩けば處々人の響ふるあり」だ。

こゝを確り會得したならば、天日是れ一で、前に云つた、超科學とか、超哲學とか、現はれて來る。こゝに至つて、我れと彼れ、此處と彼處と相對するものは無くなる。物質的の五感の支配を受けて、何うの斯うのと云ふ懸けはなれたものでは無い。水は冷かだ、火は熱いと、説明した丈けでは、聞くもの見るもの等の第三者には、何んの感じもないと同様に、説明は第二義門で、末の末なるものとなつてしまふ。冷暖自知とは、茲の有様を云つたに過ぎないのである。眞理の極致は、どうしても此處まで達しなくては不可ぬ。

それで、その今まの門を叩けば、誰れが返事をするのか、誰れが答ふるのか、又た、誰れが門を叩くのか。こゝの消息にいたつては、何者も之れを犯すことはならぬ。

瑞巖和尚が、惺々着といつたところは、又た、大眞理の秘在してあるものである。それ、今まの、眞理そのものには、生命ありで、無限の眞理は無限の生命を生み出

す。吾等は、この無限の生命に生きて居ることを自覺して居らねばならぬ。吾等の精神は、宇宙の大精神と違つたところは無い。

「釋迦何人ぞ、我れ何人ぞ」

吾れは、之れ、大眞理の權化である。分身である。片割れであるとしたならば、敢て、生死に迷ひ、順逆に悶えることは馬鹿げた話である。

而も、森羅萬象を、精神的眼中の眼で、眺め盡くされるところの宇宙を、眞理の燈明で照らして見ると、何處も彼處も柳暗花明、一點の偽りなき眞理が現出してあるではないか。こんな事も我が主人公におたづねして、常に惺々着ならば、自ら諾々と答ふることも出來よう。

テツキリ、ハツキリした眞理を會得して、無限の生命に生きんとするならば、やはり宗教的の信念を堅く生じて、常に、修養を怠つてはならないのである。

差別に處する難

一、萬物もと是れ平等

人間は、元と、是れ、平等なものである。その間に差別のあらう筈がない。否、佛も同じものである、即力即佛である。そればかりで無い、無情の草木國土さへ、猶ほ人間と同じものである。草木國土も、一切、成佛する。

昔から今日にいたる國家の歴史について考察しても、將た、又た、個人の生涯について觀察しても、一大長足の進歩を遂げんとして自覺の時代に到達すれば、既往の有らゆる囚はれから脱して、人心を直指し、その本に歸つて、平等觀念を懐くやうになるのが法だ。

國家が、未だ自覺せぬうちは、無闇に外國を恐れたり、外國の文明に心酔したり

なぞするが、一旦、自覺して國運興隆の機運に向へば、國を擧げて平等觀念を懐き、自國の力と外國の力との間に差別を認めず、歐の文明何かならん、神州には神州建國以來、他の窺ふを許さざる盛大の志氣があると云つたやうな調子になるものである。

同時に國民各自の間にも、平等觀念が頗る旺盛になつて來て、伊太利統一の勇士、ガルバルデーの如く、匹夫の身を以てして、一躍、將相の位置に上るものを生じ、上下貴賤の差別が撤去せられてしまふものだ。維新の風雲に乗じて身を立てた元勳連中の動機となつたものは、熟れも平等觀念である。

個人の私生涯に於ても、猶ほ、且つ、同じで、二十歳前後の春機發動期に達し、是れから智情意の一と進歩があらうと云ふ年頃ともなれば、國運興隆の際に於ける國家と等しく、多少、意久地ある青年は、熟れも、皆な、平等觀念に驅られ、彼れも人なり、我れも人なりと思ふやうになるものである。偽りの多い社會主義に事

理を解する力があると思はれる有爲の青年が過られてしまつて、ノラクラした遊民に變じ、氣位ばかり高くつて、一向、その實の擧がらぬ危険人物となるのは、概ね其の時期に於てある。

釋尊が四十九年、三百餘會の説法を始めらるゝ最初に當つて唱道せられたところも、やはり、この平等思想で、四河海に歸すれば同一鹹味となり、四姓佛に歸すれば同一釋氏と名づくこと云ふにあつたのである。

天地宇宙は、一金萬器である。同じ一つの金が種々雑多の器物に其形を千變萬化して居るのだ。少しく思索の歩を進め、尋ね究めて其の本にいたれば、必ずや、平等となる。有らゆる物質の原基が、皆な、一の電子に歸してしまふのと同じである。

併し、平等觀念は、元と原始的の思想で、かゝる觀念に逢著するには、必ずしも骨の投れるものではない。熟方かと謂へば、平等思想は、元來が、破壊思想であるから、これに達するには、比較的容易である。敢て、智者、天才を要するまでもなく、凡才の猶ほ之れを能くし得るところである。

二、差別觀念は建設思想

併し、人間に、平等觀念ばかりがあつて、差別觀念が無くなつてしまへば、世の中は、まるで、闇黒の中で獸が相撃つ如き雜然たる状態に陥るものである。

「花は紅、柳は綠」

とは、他なし、人間の差別觀である。此の差別觀に入るには、平等思想に到達するよりも、遙かに大なる智慮を要し、遙かに多くの經驗をも積まねばならぬのである。蓋し、差別觀念は、平等觀念の如く破壊的性質を帯びず、建設的性質のもので、原始的の思想でないからだ。差別思想は平等思想よりも更らに進歩し、更らに成熟した思想である。

天地宇宙は、一つの大きな網の如きもので、また、一大連鎖であるとも觀られ得るが、その一つ一つの網の目、若くは連鎖に相當するものが、是れ、即ち、差別である。網のあるうちは、網の目の結節を無くしてしまふ譯には行かず、連鎖のあるうちは鎖の連結を無くしてしまふ譯には行かぬが如く、天地宇宙の有るうちは、差別を無くする譯に行くものではない。否、微小の差別が亂れでも、それが直ちに宇宙全體の組織の上に、大影響を與へることになる。

社會組織の上に於ても、やはり、それと同じである。差別を全く無くしてしまへば、社會そのものも亦た無くなつてしまはねばならなくなる。社會は無差別では到底、存立し得らるゝもので無い。人倫道德の社會に缺ぐべからざる所以は實に茲にある。

履は足に穿くべきもので、冠は頭に戴くべきものである。履を頭に戴き、冠を足に穿いて、それで、社會の利益幸福を増進しようとしても、到底、出来るもので無いものである。また、これは、決して、平等思想でもない。差別を顛倒して、更らに一層、その差別に囚はれたものである。

褌袍は寢衣にするか、或は、家に寛居いである時に着るべきもので、苟くも禮儀を保つべき宴會の席上などへ着て出るべきもので無い。然るに、強いて褌袍を着けて禮儀を保つべき宴會に出席したり、弔意を表すべき葬式に列して強いて笑つたりするのは、これを稱して平等思想であるとは謂へ得ぬ。否、斯くの如きは、却つて平等を無視する「我見」に囚はれて、其の奴隸となつたものである。

眞の平等思想は、全く、「我見」を離れた「無我の愛」であるべき筈のものだ。耶蘇教が切りに博愛を唱道し、世界の同胞は悉く是れ兄弟姉妹で、共に等しく神の子であると説きながら、耶蘇教國民に、兎角、戦争好きの聲が多く、十字軍以下多くの戦争が、神の名によつて行はれ、遂ひに、先きほど歐洲戦争を醸すまでに至つたのも、耶蘇教の神は「我見」の大なるもので、「平等」の權化で無いからだ。

佛敎の神は、「平等」の權化で、萬物悉く之れを神なりとし、人間も、佛も、草木國土も、皆な等しく神なりと稱へるのが、是れ佛敎である。随つて、佛敎を信する教徒の間には、自ら大慈悲心の發起を見、勢ひ戰爭癢を懷き得られなくなる。斯くして、眞の平和は佛敎によつて始めて世界に將來し得らるゝものとなるべきは火を賭るよりも明らかだが、唯だ、今や、佛敎界に其人なく、かゝる世界的平和運動を、佛敎國たる日本より開始し得られぬを遺憾とするのみだ。

三、亂臣賊子たる勿れ

理の顯現は、秩序である。秩序の體は差別である。人間は、全く平等觀念が無いやうでは、其人や卑屈、度す可からざる者となり、憤發も、向上も、全く、遂げ得られぬ無氣力の形骸に終つてしまふが、さればとて差別の貴むべきを知らず、秩序を壞亂して悔ひず、徒らに「我見」に囚はれて進退するのみのものとなつて仕舞へ

ば、その人は、必ずや、人倫に反く亂臣賊子となるに至るものだ。

會て、歐洲耶蘇國の君主間に行はれた帝王神權説の如きは、「我見」に囚はれて差別を顛倒し、平等を無視した結果であるが、社會の秩序も蔑如し、人倫を顧みず、履を頭に載いて、是れが、即ち、平等であるとする如き過つた思想も、亦た、是れ、帝王神權説と等しく、理に逆ふ「我見」たるに過ぎぬのである。

されば、お經の中にも、

「理に順つて心を起せば善となり、理に逆つて心を起せば惡となる。」

とある。青年は、須らく、入るに容易なる平等思想に囚はれて、差別觀を忘るゝ如き者とならず、更らに進んで、平等思想の上に築き上げられたる差別觀に入り、平等體念を雜れずして能く差別に處し、「無我の愛に入りながら、而も、能く、「唯我獨尊」の見識を支持する人となるに至るを心懸くべきだ。

我見と唯我獨尊との間には、猫と虎との差よりも、更らに大なる差がある。平等

差別に處する難

天

思想に到達して亂臣賊子となり、差別を無視して理に逆へる背徳漢となるには、恰も、是れ、虎を描いて、猫に類すると其の軌を一にするものだ。國家としても、國民としても、將た、又た、一私人としても、平等思想を把持して平等思想に囚はれず、差別觀を確守して差別觀の奴隸とならず、平等主義にして、而も、秩序井然、秩序嚴格にして、それで、一視同仁の主義を忘れぬものゝみが、常に強くして、常に勝利者たるを得らるゝのである。ビスマークが獨逸の國家を強くし、祖國の國民を健全ならしめんとして、國家社會主義を唱道するに躊躇しなかつたのも、その由來するところ、實に茲にあるだらう。蘇東波の詩にこんながある。

盧山烟雨浙江潮 不到千般恨 未消 到得歸來無別事

大道周行

一、吾道一もつて貫く

子曰、參乎吾道一以貫之。曾子曰、唯。子出。門人問曰、何謂也。曾子曰、夫子道、忠恕而已矣。

(子曰く、參や、吾道、一以て之を貫く。曾子曰く、唯。子出づ。門人問うて曰く、何んの謂ひぞや。曾子曰く、夫子の道は、忠恕のみ。)

これは論語の里仁篇に出て居る語である。或時、孔子が、「參や」といつて呼ばれた。云ふまでもなく、孔子の道統を得たる者は、曾參一人である。その曾參に對して、「參よ、吾道は一以て之を貫く、吾が此の大道は、唯だ、一もつて貫いてゐるぞよ。」と云はれると、それに對して、曾子は「唯」と答へられた。唯とは、曲

禮などに「父召す時は諾すること無し、先生召せば諾すること無し、唯して起つ、」
 と書いてある。諾といふ時は、明らかに「ハイ」と返辭するのであるが、唯といふ
 と「ハッ」と唯だ最も速かに引き受けた言葉である。ところが、此間の眞意が、ほ
 かの弟子どもには、一向、分らなかつた。そこで、孔子が出られたあとで、門人が、
 曾子に問うた、「孔夫子の御言葉と貴下の御答へとは、何う云ふ意味で御座います
 か」と。曾子は、「忠恕のみ」と答へて居られるが、こゝは謂ゆる「人見て法説け」
 の手段でやられたので、此の問答往來の有様を、禪門公案の中で、類例を擧げて見
 ると、多少、會得が出来よう。

一僧が有つて、趙州和尚に向ひ、
 「狗子、還た佛性ありやまた無しや」
 と訊ねると、和尚は、
 「有」

と答へられた。すると、僧は、
 「既に、有なり。甚麼としてか、却つて、這箇の皮袋に撞入す」
 と重ねて訊ねた。和尚は、
 「他の知つて故らに犯すが爲めなり」
 と答へられた。

又た、一僧が有つて、和尚に、同じく、
 「狗子、還た佛性ありや也た無しや」
 といつて訊ねると、今度は、

「無」
 といつて答へられた。そこで、其僧も、重ねて、
 「一切衆生、皆、佛性あり。狗子、什麼としてか、却つて、無なる。」
 と訊ねると、和尚は、

「伊に業識性あるが爲めなり」と答へられた。

これは、禪門で有名な六ヶ敷い公案で、此の一無字の公案を、古來、幾多の英雄豪傑が、皆な血の涙を流して研究し、立派な人になつて居る。その一則である。問うた坊さんは、始めから理窟を持つてゐる。佛は一切衆生悉く佛性ありと言はれたのに、なぜ、狗にだけは佛性が御座らぬかと、無といふ字を、虚無、または、滅無の意味に誤解した。こんな事では、とても禪宗の眞意は分らぬ。此の坊さんは、唯だ普通の學問的の理窟で解して、無といふのは、狗子に佛性が無いと受けたのであらう。その位の坊さんで有つたから、趙州は、再び、「彼れに業滅性あるが爲めなり」と答へられた。業滅とは、平たく云へば、迷ひの心である。これを教相的に解釋するならば、餘程の言葉を費さなければならぬが、今は要がない。かう云ふことは、文字や、言語の表面からは、とても其の眞意は分らぬ。分らぬが、其の問答

往來の様子が能く似て居る。

「一以て貫く」

「唯」

と受けた。それは、孔子と曾子との間には通じて居る。門人等には、さつぱり、分らなかつた。そこで、問うたら、曾子は、

「忠恕のみ」

と答へられた。これは曾子の力である。併し、忠恕といふことも大事ではあるが、「一貫」といふことに就ては、「忠恕」と世間で解して居るくらの意味では、未だ盡きない。先づ、文意は、まことに見易い言葉であるが、扱て、その孔子の眞意を推測つてみると、なか／＼深遠微妙である。

一、花も蟻も一小天地

大體、道といふものは、我れ〜は、平生、屢ば口にして居るが、扱て、如何なるものが道であるかと考へてみると、茫たり漠たりで、何を指して道といふか、捕へ難いのである。さういふ有様であるが、先づ、一二、古人の「道」に對する言葉を擧げて見ると、老子の語に、

有レ物混成、先天地一生、寂兮寥兮、獨立而不改、周行不殆、可_三以爲_二天下母、吾不_レ知_二其名_一、字_レ之曰_レ道、強_レ爲_二之名_一曰_レ大、大曰_レ逝、逝曰_レ遠、遠曰_レ反、故道大天大地大亦大、域中有_二四大_一、而王處_レ一焉、人法_レ地、地法_レ天、天法_レ道、道法_二自然_一、

(物有り混成す、天地に先ちて生ず、寂たり寥たり、獨立して改めず、周行して殆からず、以て天下の母たる可し、吾れ其名を知らず、之れを字して道と曰ふ、強いて之れが名を爲して大と曰ふ、大を逝と曰ふ、逝を遠と曰ふ、遠を反と曰ふ、故に道大なり、天大なり、地大なり、王亦た大なり、域中に四大あり、

而して王は一に處る、人は地に法り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法る。)

とあるが、これは、なか〜面白いところである。まだ名がないから、「物」といふ。物といつても、「心」といふものがあつて、その心に對して、心以外のものを「物」といふ風に、相對的の名稱では無い。今、こゝで云ふ物とは、或物といふより仕方がない。まだ神とも佛とも、本當の名が附いて居らぬ。かういふ言葉の意味は、修養のある人には、自分の頭に、自ら概念が現はれてくるであらう。物あり混成す、一切の物が混成して居る。天地に先つて生ず、大抵、我れ〜が見聞覺知して居るところの物は、天地始つて以來の現象で、此の現象は、即ち、天地分れてのちの現象であるが、此處に謂ゆる物といふは、然らず。天地に先つて生ずるとして見ると、どう云ふものであらうか。人が眼を翳つて見ようと思つても、一向、音も沙汰もないから、寂たり寥たり、極くヒツソリとして居る。孔子も或る場合に

「上天の事は聲もなく臭ひもなし」と言はれたやうな意味で、獨立して改めず、其の物は對待的のものでは無い、嶄然として獨立して居る。

凡そ、世の中のもの、皆な對待的のもので、天あれば地あり、陰あれば陽あり、山あれば川あり、男あれば女あり、皆な相對して相手方がある。今「物あり」と指したのは、獨立的で、改まらぬもので、昔にあつても今まにあつても變らず、此處に在つても彼處に在つても同じものである。周行して殆からず、周行は普く行はると讀んで宜しい、そんな獨立の物であるが、その獨立の物は、離れて何か別に一つあるかと云ふに、左うでは無い。獨立といふことを、佛教の言葉で言ひ換へると、平等的のものである。平等ではあるが、直きに差別の上に行はれてある。と云つて、相對的のものでは無い。獨立して改めず、それでは、一切の現象から離れて獨立のものかと言へば、さうでも無い。何事にも行き渡つて居る。地を這つて居る蟻の鬚のやうな小さなものにも、野原に咲いて居る名もない小さな花にも行き

渡つて居る。而して、小さな花は、小さな一つの天地を造つて居る。小さな蟻は、小さな宇宙を含んで居る。テニソンは、

「一輪の花を知れば、天地、及び、一切萬物を知る。」

と云つて居る。やはり、普く行はれて殆からずの義であらうと思ふ。その「物」にどう云ふ名前があるかと云ふに、名はない。名が無ければ、人に示すことが出来な

三、道は神と共にあり

孔子の「一もつて之れを貫く」の「一」は、決して、二に對するの一でもなく、三に對するの一でもない。先師、洪川和尚は、

「一とは數の義にあらず。凡そ、道の體たるや、甚だ言ひ難し。其の用たるや、亦た、測られず。」

と云ふて御座る。こゝに一とあるのは、數字上の意義では無い。暫く、道といふものを體と用との二つに分ける。體用といふものは、必らず、何事にもある。今ま道體といふものから言ふと、孟子、「曰く言ひ難し」と申されたが、言ひ難しどころではない、實に、言語、文字、想像、分別といふやうなことは、すつかり立ち超えて居るから、如何なる人と雖も、此處に一言も挟むことは出来ぬ。謂ゆる「止々不須説、我法妙難思議」で、此儘、大道は顯はれて居ると云ふより外はない。

これはく〜とばかり花の吉野山

松島や、あゝ松島や、松島や

のほかは無い。それでも道體に遠ざかつて居るが、かう云ふより仕方はないのだ。然るに、その大道の作用といふものに至つては、實に、千變萬化、變現極りないものものであるから、なか〜目の子算用で推し量ることが出来ない。

今日、科學とか、サイエンスとか言つて居るのは、その部分〜について、唯だ

或る程度までの道理を明めて行くだけで、其の用といふものは、實に、限りないものものである。

かういふ工合に、之れを考へて來るといふと、我れ〜は、やはり、其中に宿されてあると言つてもよい。又た、主觀的に考ふれば、其物と共に起き、物と共に寝ね、其物と共に、常住、活動して居ると言つてもよい。老子は、そんな鹽梅に申されて居る。又た、バイブルの中にも、

「大初に道あり、道は神と共にあり、神は道なり、道は神なり」

ともあつたやうに覺えてをる。それが、佛教とか、禪とか云ふものに這入つて見ると、佛の一代の説教も、また、祖師の千七百の公案も、つまり、道といふもの、甚深微妙なることを示されたに外ならぬ。三祖、僧璨大師の言葉によると、

「至道は無難なり、唯だ揀擇を嫌ふ、但だ憎愛なければ洞然として明白なり、毫釐も差あれば天地懸隔す」

とある。されば、斯の道を得た人が、釋迦であり、孔子であり、耶蘇であり、マホメット等であつて、其の得たところに多少の深淺優劣の別はあるかも知れぬが、大體に於て、其道を得て、初めて釋迦たり、始めて孔子たり得るのである。此の道は釋迦獨り専らにして居るのでも無く、孔子獨り之れを恣にしてをる譯のものでは無い。つまり、斯の道あるが爲めに、天地は、茲に、成立つてをる。斯道あるが爲めに、我れは生活の眞意義といふものを此處に現はして居るのである。

心は明鏡臺の如し

心は、明鏡臺の如きものである。自心を欺くといふことが無かつたならば、人生の苦樂浮沈、何物か吾人の爲めに憂ひをなすものがあらうか。全體、人の此の「心」といふものは、刹那々に遷り變つて、彼れを思ひ、此れを考へて止む時がない。その遷り變つて行く刹那々には、兎角、自心の光明が覆はれて、外物の爲めに自ら欺かしめられ易いものである。世間の人は、宗教とか、信仰とかいへば、御經の中にあるものだ。お寺へ行かなければ得られぬものだ。僧侶に會はなければ求められないものだと思つてゐるやうであるが、それは大きな間違ひである。決して、わざ／＼そんな處に求めなくとも自己本心の發露するところ、そこに宗教は躍如として現はれてゐるのである。夜もすがら佛の道を求むれば

心は明鏡臺の如し

我が心こころにぞ尋ね入りぬる

で、喜怒衰樂きどあはらくに妄動まうどうしてゐる迷まよひの心こころの中に、信仰しんかうは、ちやんと現あらはれてをる。道みちはちやんと存ぞんして居をるのである。太宗皇帝たいそうくわうていは、

「人は銅どうを以もつて鏡かみとなす、我われは人ひとを以もつて鏡かみとなす」

と云いつて居をられるが、實じつに味あじはひのある言葉ことばである。他人たにんの善惡ぜんあくは、直たちに、悉ことごとくく、自己じこの教訓けうくんとなるものであるが、先方せんほうが我われを憎惡ぞうをし、我われに敵對てきたいするならば我われは其それを敵てきとせず、寧むしろ彼かれを愛あいすると共に自己じこを反省はんせいするがよい。其時そのとき、已まだに、自己じこに對たいする災禍さいくわは免まながえ得えて居をるのである。憂うれひを轉てんじて樂たのしみとなし得えて居をるのである。

惡人あくにんを救すくひやるといふことは、佛菩薩ぶつぼさつの御心ごこころである。親おやは不幸ふかうなる悴せがれほど可愛かあゆくてならぬといふが、佛菩薩ぶつぼさつも、亦またた、惡人あくにんほど、ます／＼慈悲じひを垂たれて救すくはんとなさるのである。淨土門じやうどもんでは、彌陀如來みだにょらいの懷ふところに凡夫ぼんぶは抱いだかれて居かる。

「善人ぜんにんすら猶なほ往生わうじやうす、況いはんや惡人あくにんをや」

の意味いみは、その邊へんにあるのである。

かくの如ごとくに、自己じこ本心ほんしんの中に、此この信念しんねんが生しやうじたならば、「誠まことの心こころ」、即すなはち、「欺あざむかざる心こころ」、尙なほ換言くわんげんすれば、「宗教的真心しうけうてきまごころ」である、これが、自然しぜんと現あらはれてきて、管たがひに、自己じこ一身しんが闇迷こんめいの苦境くきやうから脱だつし得うるのみでなく、更さらに進すすんで、偉大わいだいなる生命せいめいを發揮はつきするに至いたるのである。

生まれぬ先きの面魂

昔、六祖大師が、大瘦嶺で、

「不思議不思議、那箇か、是れ、明上座、父母未生以前本来の面目」

と示された一句によつて、明上座は、豁然として大悟したと云ふことである。白隠禪師は、生れぬ先きの面魂を持つて來いと云はれた。

生まれぬ先きの面魂、何處に善があるか、何處に悪があるか。換言すれば、我れは、常に、相對差別の境に頭出頭没して、迷ひとか悟りとか、是とか非とか、頭を二つに分けてをるから、惜しい、欲しい、可愛い、憎いの煩惱妄想が競ひ起るのである。一度、絶對無差別の境に歸入せんか、自他彼此の邪見は立ちどころになつてしまふ。

これは禪宗で云ふ所で、之れを他宗で云へば、南無阿彌陀佛と一心に稱へる時、

南無妙法蓮華經と渾身これに成り切つた時、そこに何んの煩惱があるか、妄想があるか。要するに、聖道門といひ、淨土門と云ふも、玄關の違ひだけで、奥に入つて見れば、皆な同じ座敷に通るのである。唯だ淨土門は情を以て導くから平易に聞かえ、聖道門は智を以て導くから六づかしく聞こえるまでである。淨土門で云へば、

唱ふれば佛も我れもなかりけり

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛

といふまで立ち到らねばならぬ。禪宗で云へば、通心徹心、自他一如になり切らねばならぬ。いくら理窟で煩惱は無いぞと抑へつけておても、下からくと頭を持ち上げて來る。石で抑へて居る間はよいが、少し隙間を見出すと、忽ち、雜草は生へ繁るものである。故に、大徹大悟を以て、根こそぎ引き抜かねばならぬ。

田の草を取りて踏み込む肥料かな

今まで害をなせし田の草も、根こそぎ引き抜いて踏み込めば、却つて、之れが肥

料になる。こゝに至るのが眞の修養である。禪の妙處である。

一般世間の人は、五慾七情のほかに心なく、而かも、此の五慾七情は、別々の存在であると考えられてゐるが、元來、これは心の影で、忽ち現じ忽ち滅する。今ま、彼奴は憎い奴だとブリ／＼してゐる所へ、可愛いものでも突然やつて來れば、忽ちにニコ／＼して、先きの怒は何處かへ無くなつてしまふ。五慾七情は小兒の喧嘩の如く、誠にたわいないものである。

故に、我れ／＼は、心の本體を徹見して、迷ひの煩惱を轉じて、直ちに悟りの菩提となすの心掛けを暫らくも忘れてはならぬ。

驢を渡し馬を渡す

一、如何なるか是れ石橋

趙州從諗禪師といふのは、澤山の古徳の中でも特に傑出して居る人である。趙州は地名であつて、地名が名となつたので、臨濟でも、洞山でも、其他の古徳が多く左うである。この趙州和尚の住せられた觀音院は、趙州城の東にあつて、彼の有名な石橋を去ること十里とある。支那の一里は、我國の六町であるから、十里といつても、我國の一里餘りである。この石橋は、天臺山の石橋と、南嶽の石橋と、それに、此の趙州の石橋を併せて三石橋と稱せられて、天下に有名なものである。或時、一僧が訪れて、

「久しく趙州の石橋と響く、到り來れば只だ略約を見る」

驢を渡し馬を渡す

趙州の石橋といつて、大層な評判であるが、何んだ、来て見ると、此んな丸木橋かと云ふのである。略約は、獨木橋、即ち、丸木橋のことである。これは借事間といつて、事に借りて宗旨を問ふたので、趙州和尚の力量如何んを試験せんとする希望を有つて居る。即ち、趙州和尚は大善知識として天下に其名が鳴つて居るが、来てみると、何んのことだ、老耄の凡僧ぢやないかといふのが眞意である。すると趙州和尚は、

「汝、只だ略約を見て、且らく石橋を見ず」

お前の目には、丸木橋ばかり見えて、石橋が見えない。即ち、お前のやうな明盲には、目前に大人物が居つても分らんといふ答へである。實に、此答は面白い、まことに淡泊りした答へであるが、中に、不可言の深意がある。禪門では、これを探竿、即ち、探り竿と云ふ。此僧、果して趙州の釣針にかゝつて來た。僧、問ふ。
「如何なるが是れ石橋」

然らば、本當の石橋はどんなもので御座るかと訊ねた。それに對する趙州の答へは實に樂な、自由な、解脱したものである。

「驢を渡し馬を渡す」

驢馬も通れば、駄馬も通る。天子も渡れば、乞食も渡る。風も吹けば、月も照る。宇宙萬象の其儘が本地の風光で、本地の風光は宇宙の大道である。森羅萬象は悉く是れによつて、各、その自性を發揮して活動してをる。此の石橋は、本地の風光を意味したものである。

どうしても、本地の風光、即ち自性を徹見しなければ、本當のところは會得が出來まい。今まは唯だ文字だけについて説明をしたのであるが、趙州和尚の答へは、實にアク抜けのしたものだ。禪も、こゝまで磨き上げると、禪らしい臭みは微塵もない、圭角の取れたものである。

二、如何なるが是れ灌溪

達磨大師が二祖を接得された時も左うであつたが、黄蘗でも、臨濟でも、徳山でも、雲門でも、皆な其の手段は孤危険峻で、實に側へも寄り付かぬほど手厳しかつた。併し、これは、殊更らに宗旨を惜しんでの故ではない。修行者に、自發的に、十分力を現はさせるには、是れでなければ不可ないからである。頭を撫で、手を引くやうなことをしては、却つて、學人の爲めにならぬ。突き落し、叩いて叩きつけると、學人は奮激し、自ら鞭ちて油断なく修行し、師家の手を借らずして力を現はしてくるやうになる。師家は之れを待つて居るのである。

斯くの如き次第ではあるが、趙州には少しも孤危の風が見えぬ。徳山の棒を行じ臨濟の喝を行ずる如きとは違つて、唯だ言句を以て人を殺活する。ところで、それが、また、痛棒より痛く、熱喝よりも熱して居る。だから、雪竇和尚も、

「海に入つては還つて須らく巨鼈を釣るべし。笑ふに堪へたり同時の灌溪老。」と賞讃してをる。大海に飛び込んでは鱒や海老が相手ではない。巨鼈が相手である。鮒も自高も餘さず救ひ取らうとするのが、阿彌陀佛の本願であつて、賢い者より馬鹿が大切であるさうなが、禪宗は是れと正反對である。先づ優れた者を相手にしようとする。かくの如く佛教は廣汎で、いろ／＼な方面が開かれて居る。趙州は目高や鮒が相手ではない。

灌溪和尚は、臨濟下の人である。或時、一僧があつて、和尚に向ひ、「久しく灌溪と響く、到來するに及んで、只だ箇の瀝麻池を見る。」

瀝麻池とは、麻を瀝すだけの小さな池といふので、眞意は前の趙州和尚に對する問ひと同じである。すると、灌溪は、「汝、瀝麻池を見て、且らく灌溪を見ず」と答へると、僧は、

驢を渡し馬を渡す

「如何なるか是れ灌溪」

と問ひを發したから、

「劈箭急なり」

と答へられた。此の灌溪の激流は強弓で射る弓よりも早いぞ、この急流の中に入ると、生死迷悟すべて押し流してしまふといふのである。雪竇の評は、趙州を賞めんが爲めに、暫く灌溪を押へたまでと、語に轉ぜられて優劣をつけべきでない。が、趙州の答へは圓熟して居る。古の多くの古徳中に卓然たるものがあると思ふ。

三、又た一點あり

また、或時、趙州和尚が、庭を掃いて居られると、一僧があつて、和尚に向ひ、「和尚は、是れ、善知識なり。什麼としてか塵ある。」と訊ねると、和尚は、

「外來底」

外から來たのだ。本來具有の塵はないぞと答へられると、又た問うて曰く、

「清淨の伽藍、什麼としてか塵ある」

と。和尚、曰く、

「又た一點あり」

そら、又た一つ、飛んで來た、かう云つて答へられた。汝、一箇を添へ得たの意味である。

四、大道、長安に透る

また、一僧があつて、和尚に向ひ、

「如何なるか是れ道」

といつて訊ねると、

驢を渡し馬を渡す

驢を渡し馬を渡す

「牆外底」

牆の外を見よ、道は縦横に通じて居る。——大道は一切處に行き涉つて居る——

と答へられると、僧は、

「這箇の道を問はず、大道を問ふ」

と云ふ。趙州は、

「大道、長安に透る」

大道は、都長安まで真直ぐに通じて居る——至道無難、異途なし、一本筋の大道である——と答へられた。皆な斯ういふ風に日常の語を使用して、却つて、人を殺活する手段を用ひられたものである。

五、雲は天に、水は瓶に

すべて、禪家の商量は、道でも橋でも石ころでも、一草一木、何んでも構はぬ、

其の場にあるものを直きに捕へて宗旨を全提するので、これは禪宗の特色である。必らずしも、神とか、佛とかを借りて來なければならぬと云ふことは無い。手に委せて其場のものを應用するのである。だから、故人も、「拈じ來つて着々親し」と云つて居られる。決して、遠方に求めず、其場々の事物に即して親しく拈じ行くところに禪宗の面白味があるのである。

以上、述べた趙州と僧との商量で、概略、その事は明らかであらうと思ふが、李翱と藥山との商量の如きも同じく其れである。李翱は、唐代の大儒であるが、或時、藥山禪師を訪ねたことがある。丁度、藥山は讀經でもして居つたとみえて、口の中をモグ／＼させて居つた、その様子が、如何にも芋堀坊主らしかつたので、李翱は腹の中で輕蔑した、こんな詰らぬ坊主が藥山かと、袖振り拂つて出て行かうとする、藥山は、ちよつと振り返つて、

「汝、何ぞ耳を尊んで身を卑しむ」

驢を渡し馬を渡す

と言はれた。すると、李翺も元來が馬鹿でない、再び、坐に歸り、禮をなして問うて言ふには、

「佛法ギリ／＼の道理は如何ん」

と。藥山は手を一上一下して、

「會すや」

分るかと言はれたが、李翺には、一向、分らないので、

「會せず」

分りませんと云ふと、藥山は間に髪を入れず、

「雲は青天に在り、水は瓶に在り」

と云はれた。まつたく、雲は蒼空に在り、水は瓶の中に在る。併し、早合點して、

禪宗は其身其儘であるなどと思ふと大きな間違ひである。こゝは各人の工夫を要するところである。李翺は其れを聞くと、言下に大悟した。そして、偈を述べて曰ふ

には、

鍊^リ得^テ身形^ニ似^キ鶴形^ニ 千株^ノ松下^ニ兩函^ノ經 我^レ來^レ問道^ニ無^ク餘^ク說^ハ

雲^ハ在^リ青霽^ニ水^ハ在^リ瓶^ニ

六、喫粥了れりや

また、或時、一僧が趙州和尚のところへ來て、

「學人乍入叢林、乞ふ、師、指示せよ」

私は、今回、當僧堂に掛錫させて戴きました。が、どうか、今後、宜しく御指導を

御願ひいたしますと云つて、入門の挨拶をした。すると、和尚は、

「喫粥了れりや也た未だしや」

お前さん、御飯を食へたか未だかと問はれたから、

「喫了る」

ハイ、最う、食べてしまひましたと答へると、和尚は、
「鉢盂を洗ひ去れ」

そんなら、食器を、清潔に洗つて置けと言はれた。

まことに、平凡な問答であるが、此の「鉢盂を洗ひ去れ」の一句には、趙州和尚の五臟六腑が光を放つて居る。一體、學人が、五年、十年と修行を積んで居るうちに、大層偉くなつたといふ重荷を擔いで居るものである。また、悟つたにしたらところで、その悟りの臭ひがコピリついて居る間は、本當の悟りでは無い。ちやうど、お粥を食べたあと、食器に滓が附着してをるやうでは不可ない、悟りも、迷ひも、一切を放下してしまはなければならぬ。そこを教へられたものである。が、此の萬事放下着の境界は容易なものでは無いよ。

七、一領の布衫重さ七斤

すべて、宗師家が學人を接得する際には、どんな事でも、言句に上さうと思ひば自由自在に言句になつて出るが、併し、その言句たるや、常識を超えた言句であるから、天下無比である。一僧が趙州和尚に向つて、

「萬法、一に歸すと、一、何れのところにか歸す」

宇宙の森羅萬象は、千差萬別であるが、畢竟、一味平等の本體界たる一に歸入すると云ふことであります。然らば、此の一味平等の本體界たる一は、また、何處へ歸入いたしますかと云ふ問ひである。すると、趙州は、

「我れ青州に在りて、一領の布衫を作る、重きこと七斤」

と、ちよつと考へると途徹もないことを答へて居られる。これ佛見法見の論量を超えて居る答へであつて、意根を坐斷して直下に趙州の奥裡に參せなければ、此間の消息は窺ひ得られぬ。

八、禾山の解打鼓

禾山和尚が、或時、垂語して曰はれるには、
「習學これを聞といひ、絶學これを隣といふ。此の二者を過ぐるもの、是れを真過といふ」

と。これは肇法師の寶藏論中にある語である。今ま、禾山和尚は、此語を引いてきて、祖師門下の直指の教へに當てられたものである。習學とは、佛道を修行すること、佛道の修行は苦界を離れて安樂の境に住する爲めである。己に苦界を離れ、安樂の境に住するを得て、も早や此れ以上學ぶことがないといふ位に至つたのが、絶學、又は、無學であるが、まだ大覺の極致でない。辛と其の附近まで至つたものである。故に、之れを隣（となり）といふ。それで、此の二つものを超越してしまつたのが真過である。大體の意味は斯うであるが、禾山は此語を掲げて學人を釣らんと

試みたのである。すると、一僧があつて、出で、問ふ、

「如何なるか是れ真過」

と。禾山、曰く、

「解打鼓」

太鼓をたたくことを知つて居るよの意味である。禾山は、此僧が、真過とか佛とか悟とかいふものを難有つて珍重して居る執見を打破せんが爲めに、此の何處からも齒の立てやうのない鐵饅頭を投げ出されたのである。すると、また、問ふ。

「如何なるか是れ真諦」

禾山和尚は、また、

「解打鼓」

と同じことを答へられた。そこで、また、問ふ。

「叩心即佛は即ち問はず、如何なるか是れ非心非佛」

驢を渡し馬を渡す

驢を渡し馬を渡す

と。禾山は、またく、

「解打鼓」

と同じことを答へられた。僧、また、問ふ。

「向上の人、來るとき如何んか接せん」

と。禾山、曰く、

「解打鼓」

どこまでも同じ答への一本槍である。これは、俱底和尚が、誰れが何んと訊ねても、たゞ指一本豎てられたと同じ答處で、言句を追つて廻つては、遂ひに不會である。禾山和尚の「解打鼓」は、盡大地、解打鼓のほかに出ないのである。今ま、此僧の問端は、いろ／＼言葉は違つて居るか、意味は初問のほかに出ない。真諦といふも、真過と云ふも、非心非佛といふも、決して、別の意味ではない。禾山の意は、真箇の大道は、かゝる名相とは遠くして遠い、言句について廻つてゐたのでは遂ひ

に不可得であるぞと示されたものである。各人は、宜しく、工夫一番するがよい。

丹霞燒佛の話

禪門では、常に向上向下相離るべからざることを説く。禪門に於ける向上は、佛何物ぞ、吾れ何者ぞと、一切萬有を超越した精神をいふのである。一切衆生悉有佛性の見地よりすれば、物と我れと毫も尊卑の別は無。無差別平等である。

丹霞の天然禪師が、曾て、洛東の惠林寺に行つた時、恰も冬の最中で、寒氣凜烈たるものであつたから、早速、本堂から、佛様の木像を擔ぎ出して火にくべ、作法にも股火をしてあたつて居つた。惠林寺の院主が、之れを見て、大いに驚き、

「なぜ、尊い佛像を焼くのか。」

と咎めると、丹霞は平然たるもので、杖で灰を撥きながら、

「我れ焼いて舍利を得んと欲す。」

と云ふ。院主が、

「本佛、何ぞ舍利あらん。」

木像に舍利があつて堪るものかといふと、丹霞は、

「已に舍利なし、更に、此の兩尊を再取して之れを焼かん。」

舍利が無ければ、序でに御脇立も焼いてしまはうと云つた。そんな事を云つたから、丹霞に罰が當るかと思へば、却つて、「院主、自ら、眉鬚墮落す」とある。却

つて、院主が罰を蒙つた。

丹霞の手許には、佛像だから有難いの、枯木の技だから詰まらないのと云ふ尊卑輕重の差別はない。これ丹霞が向上の玄底を叩いて爲人の作略を示したのであるが而かも、丹霞は、一面に斯くの如き大見識を持つて居つたが、その修行は極めて綿密であつて、馬祖道一に參じて、其の印可を受け、石頭大師の行者房に居つて三年間苦役したとある。丹霞の如きは、實に「意に毘盧の頂顛を踏んで、行ひは童子の足下を拜する」ものである。

歸省禪師の脚下點檢

浮山の圓鑑和尚と天衣山の義懷和尚と、此の二人がまだ修行中のことである。汝州葉縣廣教院の歸省禪師の家風が頗る嚴冷枯淡であると聞き、その爐輔に投ぜんと寒中風雪を犯して訪ねて行つた。かくて、且過寮で坐禪をして居ると、そこへ禪師が歸つて來られ、大いに呵責すると共に、頭から水を注ぎかけられた。この豪い劍幕に、他の雲水は膽を潰して歸つてしまつたが、此の二人だけは、ビシヨ濡れになつたままで、依然として坐禪をして居つた。そこで、

「汝等、去らずんば、我れ、汝等を打せん」

と云つて痛棒を與へられたが、それでも二人は動く色がなかつた。その不惜身命の修行振りを見届けられて、

「汝等兩箇參禪を要す、今日より掛錫隨身せよ」

と云つて參學を許された。よほど志氣の堅固なもので無いと、大概は、この寒中行水に吃驚して逃げてしまつたさうな。かゝる事をされたのは、禪師が彼等修行者の脚下を點檢されたのである。

夙に起き時を使へ

一、一日の計は朝にある

社會國家のために傑い仕事を成し遂げた人々の有様を稽へて見ると、早起きと云ふことは、確かに、其等の事業を成し遂げた一つの要素である。

今では、何事も、心なき人は、善悪を選ばず外國の風を輸入し、之れを模倣すると云ふ有様で、遂ひには、朝寢といふ甚だ厭ふべき陋習までも真似する傾きがあつて、書生の間にも、さう云ふやうなことが、殊更らに見習はれることが、以前は、随分、あつたやうに思ふ。

夙に起きると云ふことは、言はゞ一日の之れが初めなんである。古語に、

「一年の計は、一月にあり。一月の計は、一日にあり。一日の計は、

朝にあり」

といふことが有るが、まことに其の通りである。もう一つ其の奥もあるが、其れは言ばぬ方が宜からう。

一年の間に、或る仕事を立派に仕上げると仕上げざるとは、實に、最初の出發點の如何んにあるのぢやが、それは、一寸の機會からで、其の機會を捉らへるのも、逃がすのも、亦た一寸の違ひからである。

千里の道を行くにも、必ず、第一歩から始まる。物の出來ると否なとは僅かの違ひである。滴水も、集まり菟まつて、やがて、河となり、大海となりて、漲天の勢ひを成すといふ有様、こんな事は、別に、言はないでも分り切つたことであるが、大いに味はふ必要があると思ふ。

二、來る日もく唯今日

人間の一生は、一日くを、段々に繼續して行くものであるから、去年あり、今年あり、明年あり、昨日あり、今日あり、明日ありといふ次第であるが、能く考へて見れば、昨日も今日、明日も今日、明後日も今日、去年も今日、今年も今日、また来る年も今日、来る日も今日である。

一日は、必らずしも、二十四時間といふ時間に限られたものではない。ずつと、今日くを積み重ねて行くのが人間の一生である。そこで、古人の謂へる「死して後止む」と云ふところに到達する譯であるが、そこになると、筆もつ人なれば筆をもつたまゝ、瞑目して其れで澤山である。鐵砲もつ人なれば鐵砲をもつたまゝで死んでしまつても、些かも遺憾なき次第である。算盤弾く人であれば算盤弾きつゝ、息引きとつても本願であらうと思ふ。

ところが、せめて、死ぬ時ばかりは坐禪でも組んだまゝ、確り口でも噤んで立派な死にざまをして死んで見たいと云ふやうな考へで居る者もある。満更ら、悪い考

へでは無いが、甚だ迂濶な考へと云はねばならぬ。人間といふものは己れが職分と共に斃れたら、それで立派なものである。

今の若い身空を以て死ぬ時を考へて居るやうな暇は有たぬ筈である。朝から晩まで孜孜矻々として、奮闘努力し、向上して已まぬ精神を有つてゐるならば、便所で力んで居りながら、そのまゝ息引きとつても遺憾なしである。或ひは、また、一種の病氣に取り附かれ、七轉八倒、逆立ちになつて死んだとて、別に何んの遺憾もない譯である。一向の信念と云ふのは其處にある。

三、早く起きて考へよ

兎に角、五十年でも百年でも、考へてみれば、一日である。昨日だの昨年だのといろく過去があるやうであるが、皆な今日であつて、無始無終である。

我が宗教の立場から云ふと、元來、生だの死だのと云ふことは無いので、死と生

とは、夜と晝である。生は、過去に遡つても、未來に向つて考へてみても、謂ゆる生死一如である。生即ち死、死即ち生である。

かう論ずると、生死論に及ばねばならぬが、今は理窟でないから、言ふ必要はないが、何處で何をしながら死なうか、我が職分に始終し得たならば、他人は、何んだ彼の状はと笑はうとも、己れに於ては、遺憾なしであらうと思ふ。

そこで、かゝる心掛けを有つには、どうしても、朝早く起きて、十分に之れを考へる必要がある。ところが、早起きは、なか／＼難いもので、殊に、寒い時には、目覚めても枕を蹴つて起きるといふは、随分、困難である。けれども、物事に成功しようと思ふ人ならば、必ず之れを實行して渝らないものが無ければならぬ。

四、徳川家康の教訓

今ま思ひ出したが、かう云ふ話がある。或時、家康公が、自身の居間に休んで御

座ると、近侍の者共が、四方八方の話をなし、頻りと金のなる木といふことを申してをる。

「昔から、金の生る木と、能く、世間話に云ふが、米の生る木は見たが、金の生る木は、まだ、見たことが無い」

など、打ち興じて居るのを、家康公が、ちらりと耳に挟まれ、

「者共、面白いことを話して居る。金の生る木を知らぬとあれば、俺が教へてやらう」

と筆を取り寄せて、白紙の真中に書かれたのが、一本の棒であつた。そして、その左右に枝のやうなものを一本づゝ書かれて、右の方には正直、真中には早起、左の方には働きといふ字を現はして、

「これが金の生る木ぢや、能く見届げて置け」

と示されたと思ふことであるが、まことに味ひがあり、又た實に能く練れた言葉で

ある。

もう一つ、面白いのは、天海僧正が、家康公の「金の生る木」を見て、「金の散る木」を示された。それはやつぱり、一本の棒を引いて、二本、左右に枝をつけ、嘘吐き、短氣、悋氣と、同じく一本づつに書き現はして示されたのであつた。何れも通俗ではあるが、眞理を道破した語である。

五、嘘は悪の始まり

嘘を吐くといふことは、一番、悪いことである。すべての悪い行ひは、此の嘘を吐くといふことから始まるのである。こんな事は、くどく言ふまでも無く、分つて居ることであるが、殺人だの、姦淫だの、強盗だの、其他の罪惡の源を訊してみると、嘘を吐くといふことが土臺になつて居るといつてよい。

嘘も方便など、云ふ誠に淺薄な考へから、一時逃れの間合を言ふのが、一ばん悪い。また、たとひ、罪人とまでならずとも、政治家でも、實業家でも、其他すべての階級の人が、謂ゆる權謀術數的に、一時を胡魔化さうといふ考へが動機となつて遣つた仕事は、到底、駄目である。結局のところ、正直でなければ、物事の終りを全うすることは出来ない。

一國の外交などにしても、柄は、さうであらうと信ずる。外交の秘決は、嘘を吐くにあらずして、正直なところにある筈である。そこで、世間には、嘘から出た眞、眞から出た嘘といふことがあるが、時には誠心誠意から出たことが、他人には嘘のやうに思はれることがある。それは嘘にして其實は嘘ならず。ところが、もともと何か心にたくらむ事があつてやる事は、表面は眞のやうに見えるが、永續はしない。

六、時に使はるゝ勿れ

餘談になつてしまつたが、兎に角、一番最初が大事である。人間の活動の初めは朝であるから、出来るだけ早起きをする習慣をつけねばならぬ。衾のところに居る小僧たちも、なか／＼早起きは苦しさうであるが、ちつとくらの睡眠不足でも、朝は思ひ切つて起きると、追ひ／＼習慣になつて辛くなくなる。命令を受けてやるやうでは不可ぬ。

吾がものと思へば軽し笠の雪

で、外見には、さも重さうに見えても、吾がものと思へば、何んでも無い。早起きは、是非、實行したいものである。

どうも遅く起きると、一日、仕事に追つかけられるやうな氣がするが、五分でも十分でも、人より先きに起きると、續々と湧いてくる仕事を、此方から追つかけて愉快に一日が送れる。大分、趣きが違ふものである。故に、古徳も、

「汝等諸人は十二時に使はれ、我れは十二時を使つて居る」

と弟子たちに示されてあるが、さうなくてはならぬ。金を使つて道樂するものは、それは金に使はれて居るのである。死金を使ふのは、實に愚なこと、他人の爲め、社會の爲めに金を活がして使ふのとは、同じ金でも人の心によつて大變な違ひが出て來るのである。時も、亦た、金である。昔から寸陰寸璧と云つて、時すなはち金といふ考へは有つたものであるが、時に使はれては駄目である。宜しく時を使はねばならぬが、それには、先づ、第一に早起きを實行して行かねばならぬのである。

大なる樂觀の上に

一、千差萬別の情緒

皎々たる光を放つて、大空に輝いてをる一輪の月に對しても、これを見る世人の心は、決して、一樣では無い。或者は、

月見れば千々に物こそ悲しけれ

わが身ひとつの秋にあらねど

と詠じ、或者は、また、

此世をば我が世とぞ思ふ望月の

缺けたることの無しと思へば

と詠じて、各、異つた感懐を漏らしてをる。月そのものに在つては、決して、喜怒

哀樂の情が存するのでは無い。これを見る人々の心に千差萬別の情緒が湧くのである。

面白い愉快な心を懷いて居る人が月に對したならば、月の光も面白く愉快に思はれるであらう。悲しく情けなく感じて居る人が月に對したならば、一層、悲しみを増し、涙を催すの種となるであらう。

牀前明月光

疑是地上霜

舉頭望山月

低頭思故郷

は、月に對して、故郷を思ふの作である。

獨上江樓思渺然

月光如水水連天

同來翫月人何處

風景依稀似去年

は、月光に對して、同遊の故人を思ふての作である。

獨上高樓望八都

黑雲散盡月輪孤

茫茫宇宙人無數

幾箇男兒是丈夫

は、月に對し、發憤しての作である。

かくの如く、同じ一つの月に對して、感ずる人々の心は、いろ／＼さまざまである。即ち、一つの月を、二つにも、三つにも、二十にも、三十にも、百にも、千にも見える。が、これを、眞理の上から云つたならば、月を見れば悲しいものだと斷ずるのも、本當の月を觀たものではない。また、楽しいものだと斷ずるのも、本當の月を眺めたものでは無い。月の本體にあつては、樂しとか、悲しとかいふことの上に超然として居るのである。

凡そ、吾人が、此の人生を眺めるのには、二つの見方がある。一は人生を愉快な面白いものと眺める、即ち、樂觀である。一は人生を果ない悲しいものと眺める、即ち悲觀である。樂觀の人が、月に對し、花に對し、鳥に對すると、樂しと觀ずる。悲觀の人は、之れに反して、悲しと觀ずる。が、この月・花・鳥、換言すれば、宇宙

人生の本體は、樂しとか悲しとかいふことを超越して居る。悲しむのも樂しむのも決して、宇宙人生の本體を眺めたといふ譯では無い。

二、四苦八苦の人生

扱て、各人には、それ／＼欲望といふものがある。この欲望を有するといふことは、必ずしも、罪惡であると斷ずるわけに行かぬ。なぜなれば、この欲望は、これを悪用するからこそ貪慾といふ忌むべきの状態を呈するのであるが、若し、これを善用したならば、意志の力となつて、國家、社會の爲めに、貢獻し得る事業の原動力となるからである。

欲望にも、いろ／＼あるが、その中でも、知識欲、生存欲、名利欲は、最たるものである。知識欲といふのは、何事に限らず、知り度いと願ふ欲望であつて、これは誰れでも自分を一寸省みると分ることであるが、例せば、嬰兒などが、おひ／＼

智慧づくに従つて、見るもの聞くものについて色々訊ねる、初めは名を聞き、次ぎには意味を訊ねる、そんな順序で、一般の人が、初めは普通の事柄を知ること満足するが、だんく知識が進むに従つて、學問的に知りながら、更に進んで哲學的に知りたくなり、それでも安心が出来なくなつて、遂ひには宗教界に入ることになる。

名利欲といふのは、利欲と名聞欲とを一緒にして云つたもので、世間の人々が、皆な、知識は貴い、學問は大切であると叫んで居る。勿論、それに違ひはないもの、併し乍ら、かく叫んで居る人々の胸中を解剖してみると、その殆ど大部分が、自分の利益のため、自分の名譽のためといふことに歸するであらうと思ふ。成程、口では、社會民衆のためである、天下國家のためであると言ふ。幾分は、社會民衆のためであり、天下國家のためでもあらう。が、全然、自己といふものを閉却する譯にも行くものでない。然らば、口では如何に立派に道德者らしいことを述べて居

つたところで、腹の中は、自分の名譽のため、自分の利益のためであることは明らかである。要するに、何人も、食はず飲まずには、働くことも學問することも出来ない以上、此の利欲・名聞欲は一般人の通有性ともいふべき欲望である。

それから、生存欲といふのは、何時までも此世に生存してゐたい、死にたく無いといふ欲望であつて、昔は、遠く海に浮んで、不老不死の仙薬を求めた古人もあつたくらいで、これも殆ど一般人の通有性である。如何なる貪欲漢であつても、若し生命に代へ得るといふならば、山ほど積んだ金も要らぬといふであらう。天子の貴い位も、或は擲つて顧みないかも知れない。有らゆる欲望が、此の生存欲に越すものは無からうと思ふ。或る立派な人が、臨終に際して、「あら死にともな死にともな」といふ辭世の句を吐いたといふのは頗る面白いと思ふ。

人間は、誰れでも、以上の三つの大なる欲望がある。が、それは、誰れも満足され得るものであらうか、いくら欲しいと希つても、なか／＼思ふ通りに得られ

ない。即ち、是等の欲望は容易に達せられるものではないのである。欲望が達せられないとしたならば、必然的に限りなき苦痛が生じてくる。釋尊は、之れを、人生の四苦八苦と教へられて居る。四苦といふのは、生・老・病・死の四つで、この四苦に、哀別離苦（愛する者に別れねばならぬ苦み）と、怨憎會苦（仲の悪い者と一緒に居なければならぬ苦み）と、求不得苦（願ひ求むることが遂げられぬ苦）と、憂悲惱苦（思ひ悩む苦み）と、この四つの苦みを加へて八苦といふのである。この四苦八苦は、人生に於て、到底、免れ得ないところのものである。

三、偉大なる宗教心

四苦八苦が人生に於て免れ得ないものである以上、世の中は、まことに、不満足に出来てをるものである。だから、悲觀する方面から見て行つたならば、儘ならぬ世の中、思ふ通りにならぬ世の中、悲しい苦しい詰らない人生である。さうして、

此の悲觀的苦痛が、日夜に、我が心を責め苛なむ。かくして、悲觀の極、自然に、宗教的精神といふものが起つて來ることになるのである。

この宗教的精神こそ、實に時間空間を貫いたところの大精神である。これこそ永久的精神と云ふべきものである。これを哲學的に説明せんとすると、なか／＼六ヶ敷しいが、平たく一口に言ふと、

「神佛を祈れ、神佛を念ぜよ」

の一言で盡きる。必ずしも佛教でなければならぬ、佛でなければならぬと狭い窮屈なことを言ふのではない。

「あゝ神よ！」

と渾然同化してしまふところを云ふのである。門徒宗の信者は、南無阿彌陀佛の稱名で安心して死んで行く、加藤清正は、南無妙法蓮華經の七字の題目を旗印にして千軍萬馬の間を、無人の野を行くが如くに進んで行つた。

念佛であれ、題目であれ、アーメンであれ、決して、死んで行く時の氣休めに唱へるのではない。平生、一切の行爲が、原動力を、こゝに發しなければならぬ。宗教心の偉大なる點はこゝに在る。人の一生は、この宗教心といふ偉大なる信念を有せずして大事を遂行することは、到底、出来ないことである。

まゝ、西洋人に斯くの如き人ありと聞くが、何か事業を企て、一生涯、側目をふらずに進んで行く、そして、自分一代のうちに出来ねば子の代に、子の代でも出来ねば孫の代にと、目的を貫くまでは續けて行く、この堅忍不拔の精神こそ、宗教心といふ偉大なる信念に本づくのであつて、此精神が國家多難の際に發現すると、七たび生まれ、國賊を亡ぼさんといふ大精神となるのである。

四、永久不變の大道

此の宗教的大精神は、各人が生まれながらに有してをるので、決して他から貰つ

て來たり借りて來たものではない。固より、教へられて得られるものでも無い。人はこの大精神、大信念に坐して、人生を眺めると、人生は誠に面白い、悲觀の風なんかは更らに吹かない。なぜかと云へば、かくの如き堅固なる信念を持して世に立つと、自己の仕事は活き／＼として萬世に傳はる。換言すれば、我れといふものが永久不滅といふことになるからである。例せば、釋迦、或ひは、孔子を觀念すると、その釋迦や孔子の面目、精神が、歴然として、今ま此處に存してをる。此の二人は、數千年前の人であるが、たとひ形骸は土に歸してをつても、大なる教へ、深き感化は、千古不滅である。楠公父子の如きも、亦た、さうである。我が國民が一たび忠といふことに思ひ及ぶと、直きに楠公父子の大精神、活面目が、今ま尙ほ儼として存在してをるのを感じる。即ち、忠といふ上に、永久の生命を保つて居られるのである。

要するに、世間の、樂觀といひ、悲觀といふものは、枝葉の觀念に過ぎない。樂

觀、悲觀を超越して、そこに、始めて、永久不滅の大道を認めることが出来る。彼の朝咲いて午を待たず萎れてしまふ朝顔の花は、まことに短い壽命のやうではあるが、朝顔の本體から云へば、六七月の頃から秋の末まで花は咲いてをる。半歳に近い永い壽命と見ることが出来る。更らに深く考へると、今年の種は去年の種から生じ、去年の種は一昨年きねんの種から生じてをる。過去に際限がなく、未來に際限がなく連綿として續いてをる。決して、果ない一生ではない。人の一生も、形體の上から云へば短い壽命ではあらうが、本體から眺めると無始無終である、而して、この本體たる宇宙の大精神を人格化したものが佛であり神である。吾人は、この大精神、大信念を手に入れて、そこに立脚すると、前途洋々として春の海の如き、平和な愉快な希望に生き／＼として一生を終ることが出来るのである。諸君は、宜しく、小なる樂觀悲觀を超越して、大なる眞の樂觀の上に安住するやうに努力せられんことを祈つて已まぬ次第である。

正法に不思議なし

一、晴れた日は晴れ

昔から、「正法に不思議なし」といつて居る。佛法には決して不思議といふものは無い。然るに、世間には、悟つた人には、何か不思議な事柄、奇特な行ひでもあるかの如くに考へて居る者もあるやうであるが、いくら悟つたからと云つて、奇術師以上の藝當を演じ得るといふ譯ではない。曇つた日は、やはり、曇つて居る。晴れた日は、やはり、晴れて居る。女は女、男は男、大人は大人、小供は小供である。佛説には、決して、世人を驚かすやうな妙智奇な事柄は説いてない。

山を隔て、烟を見て早く是れ火なるを知り、牆を隔て、角を見て便ち是れ牛なるを知る底の俊發英利の漢は、平凡では無いに違ひないかも知れぬが、これとて我が

禪家に於ては尋常茶飯事である。決して、奇特事とすべきではない。全體、この天地間に、これが奇特事で御座ると云つて、取り立てゝ云ふべきものは無いのである。奇妙である、不思議であると云つて、世間の人が騒ぐのは、その人々等の眼界が餘りに狭く、その人々等の智識が餘りに淺いからである。佛説の謂ゆる因縁の意味が徹底的に了解出来たならば、決して、奇妙も、不思議も、奇特も、不奇特も無いのである。

二、百丈の獨坐大雄峰

昔、一僧があつて、百丈懷海禪師に向つて、

「如何なるか是れ奇特の事」

といふ問ひを發した。絶學無爲の閑道人たる大悟底の人の上に、奇特とか不奇特といふことが御座いませうかといふ表面の意味であるが、句裏に機を藏して居る。敢

て百丈和尚の虎鬚を撫でようとする意氣込みがある。すると、百丈和尚は、「獨坐大雄峰」

といつて答へられた。此の百丈といふのは百丈和尚の住してをられる山の名であつて、その高さが百丈もあるといふので斯ういふ名がある。實は、大雄山といふ山の異名である。百丈和尚の答へは、奇特も何もない、衲は、此の大雄峰に獨坐してをるよといふのである。これは、百丈和尚は、大雄山の主人公であるから斯う云はれたので、釋迦如來ならば「獨坐靈鷲山」と云はれたであらう、阿彌陀如來ならば「獨坐極樂世界」と云はれたであらう。兔に角、何に食はぬ顔附きをして、「獨坐大雄峰」の一言で此僧の力量を點檢された。此僧、唯だものでは無い、「獨坐大雄峰」の一言で、百丈和尚が、兩頭の機に墮してゐないのを認め、あゝ難有いといはぬばかりに直ちに禮拜した。すると、百丈和尚は、ピシリと此僧を打たれた。これは百丈和尚の活機活用、天魔外道も窺ふに道なき態度を示されたものである。

此僧の「如何なるか是れ奇特の事」の問ひに對して、百丈和尚の答へが、若し、奇特玄妙の何ものかに坐着してあるやうな點があつたならば、此僧は直ちに和尚の法域に肉薄して、すつかり、和尚の鼻毛の數を讀んでしまつたであらう。

三、障子の引手峰の松

之れを要するに、佛法には、何等、不思議も奇特事もあるのではない。若し、悟つたが爲めに變つた人間となつたと云ふ者があるならば、それは悟りの病ひに犯されたものである。謂ゆる「悟り了れば未悟に同じ」で、政軍家は政事家、軍人は軍人、商人は商人、農夫は農夫、各、其の職分を守り、業務に勉勵して行くほかに、別段、變つたことの有るべき筈はない。一休和尚は、

佛法は障子の引手峰の松

火打袋に鶯の聲

と詠まれて居るが、佛法の眞髓たる宇宙の大道は、障子を開け閉てするところにも峰の松風の音にも、腰に下げた火打袋にも、鶯の臨にも、鳥の姿にも、明歴々、露堂々として存在してをる。吾人の一舉手、一投足は、悉く、大道そのもので、吾人は、大道の眞唯中に自由自在に思ふまゝの活動をしてゐなければならぬ筈である。それが出来ないといふのは、外境に囚はれ、それに執着し、束縛されて、自由の分を失ふからである。若し、一切の繫縛から脱離して、安住不動須彌山の如しといふ、身心脱落の境界に達したならば、各人本来具有の天真佛が現はれて、縁に應じ、境に従ひ、何んの苦痛もなく、スラ／＼と自由自在の行動が出来るであらう。

明治年間、曹洞宗の高徳に、原坦山和尚といふのがあつた。或時、道友兩三名と共に、旅行をされたことがあるが、途中、一つの川に出會したが橋がない。そこに一人の妙齡の美人が、越さうとして越し難いために躊躇してをつた。和尚、これを見

ると、法衣の裾を高々とからげて、その美人を引つ抱へたまふ川を渡つて、何知らぬ顔でさつさと行つてしまつた。ところが、其晩、宿に着いてから、道友等が、「尊公は怪しからん男だ、出家の身でありながら、女を抱くとは何事か」と詰つた。すると、和尚は、フ、ンと笑つて、

「衲は川を越すと同時に放してしまつたが、尊公等は、まだ、女を抱いてをるのか」

と云はれたさうである。これはなか／＼味ひのある話である。坦山和尚の如きは、臨濟禪師の謂ゆる「寸絲を着けざる」境界にあるんで、美人を見れば美人と感ずる、醜婦を見れば醜婦と感ずる、たゞ其れだけである、そこに何等の執着もなければ悶えもないのである。

四、機類に應じて導く

かくの如く、大悟徹底した人は、喫茶喫飯、痾尿放尿、すべてが悟らない以前と變りがない。唯だ、六根に映じ来る六境に對して、露些かも執着しないところに價値がある。丁度、磨き澄ました明鏡裏に、佛來れば佛現じ、漢來れば漢現じ、胡來れば胡現じて、しかも其の蹤跡を留めないのと一般である。これが大悟底の人の大神通である。

日本曹洞宗の開山、承陽大師の御詠みになつた道歌に、

水鳥の行くも歸るも跡たえて

されども道は忘れざりけり

といふのがあるが、全く、此の御歌に道破されて居るやうに、何んの跡をも止めずスラ／＼と滞りなく、活潑々地に天地宇宙の眞理大道を往來し得るのである。

釋尊は、大小半圓五時八教、機に應じ縁に従つて人々を導かれた。また、各宗各派の祖師方も自力教であるとか、他力教であるとか、淨土門であるとか、聖道門で

あるとか、いろくくの宗旨を立て、相應する機類を導かれた。其他、大乘だ、小乗だ、向上門だ、向下門だ、彼相門だ、還相門だ、顯教だ、密教だ、不變真如だ、隨緣真如だ、種々様々の名稱があるが、その中に何か變つた難有いことでもあるかと云ふと、これが妙不可思議な奇特事であると云つて、取り出して示すべきものは無い。何れのお經にも「最尊無上」と記してあるが、これは佛教によつて道を得た其人に取つては最尊無上であるとの意味である。

今日、世人の多くが、禪宗とさへ云へば、直きに拂拳棒喝を事とし、口を開けば白を黒、牛を馬といつたやうな譯の分らぬ唐人の寢言みたやうなことばかり云ふのが豪いといふやうに考へ、殊に、多少でも禪をやつた者は、兎角、そんな真似ばかりを仕たがつて、俱胝和尚は何事にも一指を豎てたとか、丹霞和尚は佛像を焼いて尻をあぶつたとか、百丈は馬祖に鼻をひねられて悟つたとか、そんな事ばかり云つて、如何にも其んな處にばかり悟りが轉つて居るやうに思つて居るやうであるが、

大きな心得違ひである。學人たるものは宜しく三思三省しなければならぬ。

禪と鎌倉武士

一、花は櫻木人は武士

禪といひ、鎌倉武士といひ、數百年前のことを此處へ持ち出すやうで、事は頗る古いやうであるが、しかし乍ら、衲は、聊か、現下の時局に感ずるところがある爲めに、かう云ふ題を思ひ起したのである。

尙ほ、本題に入る前に、一言申しておき度いのは、此の「禪」といふことである。禪といふと、世人は、先づ、かやうに考へられるであらう。はア禪……あれは禪僧……其處で禪宗……即ち、禪宗坊さんが來て、さうして此の廣い世間の人達、又は、各宗諸大徳方の前に於て、禪宗のことを、殊更、喋々するやうに取られるかも知れない。けれども、然うでない。實は、それを、一言、斷つて置かうと思ふので

ある。

衲の見たとところに依ると、尠くも、我が佛教各宗の眞隨ともいふところに至ると必ず禪といふものが無ければならぬ。と斯う思つて居る。此の意味に於ては、敢て今ま歴史的に成立して居るところの禪宗の禪、その中の曹洞禪とか、臨濟禪とか、相似禪とか、野狐禪とか、さう云ふ意味のことを言ふのでは無いのであつて、「禪」といふ字を借りて、佛教各宗の眞隨……其の各宗の眞隨を「禪」といふ言葉に代表せしめた積りである。かう云ふ工合に豫め考へておいて貰ひたいのである。さうして、鎌倉武士……鎌倉といふと、直きに禪を思ひ出し、禪と云ふと、直き武士といふことを思ひ出すといふやうな關係で、これは一種の衲が聯想であるが、歴史上も、やはり、さう云ふ有様に出來上つてをる、鎌倉武士、謂ゆる、人は武士といふと、人の中の人、たとへば、花といふと櫻を思ひ出すやうな關係で、茲に禪といふ字と、鎌倉武士といふ字は、極く親しい意味もあり、關係もあるから、旁、

かう云ふ題を思ひ出したのである。

二、鎌倉に於ける宗教

頼山陽であつたと思ふ、何分、小供の時に讀んだのだから、言葉通りには覺えては居らぬが、鎌倉時代のことに就いて、此んな意味のことを言つて居つた。

「鎌倉の武力といふものは、關八州の其れに敵する。それで、關八州は何ヶ國に敵するかと云ふと、日本六十餘州に敵する。」

扱て、それなら、日本全國の武力は、世界にも敵するか知らぬが、それは、今日、言ふところで無い。これは武力について言つたことであるが、當時、鎌倉に於ける宗教……宗教と云つても、今まは佛教各宗についての宗教で、鎌倉は政治に於ても新機軸を出して居るし、武力に於ても今ま言ふが如く強大なものであつた。それと同時に、佛教と云ふことに就いても、鎌倉が一新紀元を劃してをると云つてよから

うと思ふ。

それより遡つて、奈良朝時代の佛教とか、天朝時代の佛教と云ふものが固より有つたにも拘らず、鎌倉といふ時代に至つて、初めて、佛教中の新宗教といふものが起つたので、これは、其邊の歴史を調べてをられる人は能く承知であらうと思ふ。今ま納が記憶から浮かんだことを名稱だけ擧げると、鎌倉時代に起つたのは、

時宗

融通念佛宗

淨土宗

淨土眞宗

日蓮宗

禪宗

などで、其等が鎌倉時代の新宗教といつても可からうと思ふ。若し、之れを、鎌倉時代に於ける新宗教と言はゞ、その前のは舊佛教と言つても差支へないと思ふ。

併し、之れは、時代について言ふので、大體、鎌倉以前の佛教といふものは、すべて貴族的であつたと言つても可からうと思ふ。そんなら、鎌倉時代に起つた佛教は何うかと云ふに、貴族に關係はないことは無いが、大體から言ふと、平民宗と言つて差支へないと思ふ。

舊來の佛教は、動もすると、繁文褥禮に流れて居るが、鎌倉時代に起つた佛教は頗る直截簡明である。手取り早い話は、鎌倉以前の佛教は、理論的、學問的の宗旨と言へる。然るに、鎌倉時代に、新たに起つた佛教なるものは、理論よりも實際を貴び、學問よりも信念に重きを置いた。

例へば、日蓮上人は、天臺がいろ／＼理論を以て解釋したるところの佛教を、即身南無妙法蓮華經として、活きた題目を唱へ出した。淨土宗も學問的に解釋しようとすれば、なか／＼六ヶ敷いが、偏へに南無阿彌陀佛と切り出したは、即ち、法然

上人の力で、勿論、南無阿彌陀佛は、今ま新たに唱へ出された譯ではないが、兎に角、新しい叫びとなつて現はれて出たことは事實である。

三、禪宗は何んであるか

それに次いで起つた禪宗は、何んであるかと云ふと、これは、また、いろ／＼唱へ方があるが、禪は極めて簡單明瞭である。即ち、

「莫妄想」

の三字でもよい。或ひは、また、

「無」

の一字でもよい。或ひは喝を行じ、棒を行ずるも可からう。昔、「如何なるか是れ佛」と問うた者あるに對して、

「即身即佛」

と答へられた古徳もあるし、また、

「麻三斤」

と答へられた古徳もあるし、また、

「乾屎橛」

と答へられた古徳もある。

かくの如く、鎌倉時代の佛教は、何れも直截簡明を貴びて、時代人心の要求に應じて起り、他力と云はず、自力と云はず、恰も寸鐵人を殺すの概がある。此の活力あり、生命ありて、宇宙の根本に接觸し、人生の眞歸趣を指示するものを衲は禪といふのである。

されば、佛教各宗には、孰れも禪といふ意義を備へて居らぬ宗旨は一つも無いのである。各宗それ々の堂奥に入つたら、必ず、禪に歸すると思ふ。敢て、必ずしも禪宗として成り立つて居る我れ々の宗派の途轍の如くならなければならぬと云

ふのでは無い。

此の前の世界的戦争について、我れ々の如き學問のない者でも、實物教育で、いろ／＼の事を見せられた。平素、富の高きと、兵の強きを以て、内外より信ぜられて居つた國が、偕て、兵端を開いて見ると、存外、左うでも無いやうな國があるかと思へば、一方には、夕べ見た夢が、一朝、覺めたやうに、ロマノフ朝廷がモロクも覆つてしまつて、新たに無産黨共和政府が起つた。

それから、これは、今度の戦争によつて新たに起つたわけでは無いが、隣邦の支那はどうか。また、今度の戦争の導火線になつた、塞耳亞は何うか。白耳義は何うか。だん／＼其國について見ると、我れ々が平時に於て考へて居つたのと、今の實際とは、餘程、思ひ違ひがあつた。

我れ／＼素人は勿論ではあるが、其の玄人と稱する經濟家、政治家に於ても、大變な思ひ違ひがあつたと思ふ。此の戦争について、各國それ／＼長所も現はし、

短所も現はし、強い點もであらうが、弱點も暴露したやうな觀がある。

、確乎不拔なる中心

要するに、物質的戦争に於ても、精神的戦争に於ても、渾然として統一を成して
確固不拔なる中心の有る國が、今日まで、勝つものは勝ち、勳功を奏するものは奏
して居ると思ふ。

國には國の中心あり、家には家の中心あり、人には人の中心があるので、凡らゆ
る異分子を打して一丸とし、各、精神的統一、舉國一致の、此の精神が強いが弱い
か、此の精神が全く亡びたか亡びぬかによつて、殆ど、其國の盛衰興亡を、豫め
想像することが出来る。

而して、我國の現状は何うかと云ふと、お互ひが平生から誇つてをる武士道、日
本魂といふこの精神が、開國三千年後の今日、果して、嚴然として、金鐵の如きも

のが有らうか。此の五千萬なり六千萬の人間の心が、殆ど、擧つて、茲に一致して
居るものであらうか、それは、一致したものが如何やうに働いてをるであらうかと
云ふ實際について眺めてみると、衲には分らぬ、どうしても分らぬと云つて置くよ
り仕方がない。

世間の人々は、これ丈の言葉で、人々箇々の常識なり、學問なりに照らして考
へられたならば、此の世界に誇つて居る國は、皇統一系の國、人は忠孝一致の民族、
その大和魂——武士道——と云ふ精神が、現在、如何やうに働いてをるか、衲には
分らぬと云つたが、各人には必ず分つて居ることと思ふ。かう云ふことに基いて、
衲は斯様に古い題を選んだのである。

世界戦争の始まらぬ先き、英國の或る識者が、かういふ事を言つたと聞いてをる、
英國の敵は、決して、獨逸ではない。勿論、他の國々ではない。動もすると、英國
人は、英國の敵は獨逸だくと小供などに教へたのであるが、今の識者の云ふとこ

ろに依れば、英國の敵は獨逸でもない、其他の國でもない。何が英國の敵かと云ふと、英國の敵は英國の富であると云ふのである。

聞きやうによつては、如何にも矯激の言葉のやうであるが、決して、左うでない。納に云はしむれば、今日の日本の敵は、何んであらう。敵國外患なき者は其國亡ぶ。常に、敵を假想して居らねばならぬ。今日、日本の敵は、獨逸でも、英國でも、米國でも、世界の何れの國でもない。政治界から見ても、經濟界から見ても、敢て血流しの戦争する計りでなく、我れ々の敵が我れ々の周圍を取り巻いて居る。

五、日本の敵は何んであるか

若し、納をして、前の識者の言を借り來つて、日本の敵は何んであるかと言はしめたならば、日本の敵は輸出の超過でも無い。輸出の超過が幾億圓など、浮か／＼言つてをるのも敵か知らぬが、併し、小敵である。成金が何うの斯うのと云つて居

る、それも一つの敵であらうが、併し、成金を直ちに敵と云ひ得られない。言ひ得られても、それは小敵である——小敵とても侮つては大變であるが——納は極く單純なるところの物質主義、極端なるところの黄金崇拜、そして、それに伴ふ、淫靡、奢侈、怠惰、墮落、これは我國の強大なる敵であらうと思ふ。實に大々的強大なる敵であらうと思ふ。

日本の國家は、此の通りに行つたならば、間もなく亡びるかも知れぬと嘆じた學者もある。これは極言である。極言は納共の如き者には言ひ度くない。が、併し同感である。納は泣き言をいふのは大嫌ひであるが、今日、世上の有様を見ては、辨慶ぢやないが泣かざるを得ない。我が國民精神の統一は如何ん、精神界の現象は如何ん。その紛々芸々たる亂麻の如き状態を悲觀すれば、我が國民の精神上の危機と言つて宜からう。

現に、我國には、耶蘇教もあり、佛教も固よりある。佛教にも各宗派があり、耶

蘇教にも各宗派がある。それが、直ぐに、混乱して居ると云ふのでは無い。宗派は幾ら在つても宜いが、我れは國民の一人として考へて見ると、果し、我れ國民が、克く忠に、克く孝にの犠牲的精神を以て、事實に統一されて居るか何うか、これは統一されて居らぬといふやうなことは、柄は斷言されないが、大變、疑はしい。

それゆゑに、我が日佛教各宗派が、禪といふ意義の下に結び付けられてをるやうに、我が國民全體が、すべて、武士道的精神に統一せんことを希望するのである。茲に、鎌倉武士といつても、鎌倉といふ猫顔大の一地方を指して言ふのでは無い。鎌倉は日本全土を意味し、武士は國民全體を代表せしめた柄の考へである。併し、言葉の言ひ廻しが拙いから、左う受け取れぬかも知れぬ、そこは、察して聞いて貰ひたい。

六、歴史の事實に就て

扱て、歴史の事實について話して見ようと思ふ。先づ鎌倉時代の禪に因縁ある北條氏を擧げて見ると、北條氏は九代と云ふが、二代は執權者が短命で數に入らぬから、事實に於ては七代である。北條氏が、身は陪臣から起つて天下の政柄を執つて七代まで之れを傳へたといふのは、傳へらるべきところの原因があつてゝあらうと思ふ。

且つ、頼襄氏が、其の遺稿の中に書いて居るところに依ると、唯だ北條氏の悪いところばかり書いて、而かも、それが、禪を信じたから來た悪感化のやうに毒筆を弄して、唯だ彼の義時、高時のみを擧げて、恐れ多くも、一天萬乗の君を孤島に流し奉り、その他、悖戻な行動をしたのは、彼等が佛教を信じて、就中、禪を修めたからだ、巧みな文章を以て書いて居る。

頼襄は、物知りと云はれてをるにも拘らず、大いに事實を誤つてをるのは何事ぞ。元來、義時、高時は、禪に參じた者でない。たとひ、彼等は、圓顛方袍の姿をしてゐても、眞の宗旨には門外漢であつた。人もあらうに、此の二人を、北條氏の代表的人物であるかの如くに引き出したのは、偏見も亦た甚しい。寧ろ、深く、佛教を信じ、禪を修したのは、泰時、時頼、時宗の諸公である。以下、少しく、其の事實を舉げて見ようと思ふ。兎に角、北條氏が、彼の立派な治績を舉げた裏面を窺つて見ると、泰時の如き、最も敬虔なる佛教信者である。

七、武士道を組織的にした

或時、泰時が、明惠上人に、治國の要を問うた時、上人は、「國を治むるは、病ひを治むるが如く、宜しく其の因を察せねばならぬ。公、先づ、其の欲を去るべし。欲は國を亂すの本なり」

と云はれた。また、泰時は、上人より、

「あるべきやうは」

と云ふ七字の教へを受け、之れを堅く守つて、實行したので、彼れが如く立派に、政治上に於ても、立法上に於ても、其の成績を擧げることが出来たので、當時、武士道を組織的にしたのは、泰時、與つて力ありと云つてよいと思ふ。

「あるべきやうは」

この言葉は古臭いかも知れぬが、實に、千古の名言で、これを實行してこそ、はじめて、國家の秩序も保たれ、また、健全なる國家が形造られるのである。

外史か何かにあつたと思ふが、泰時が明惠上人から、

「天下を治めんとする者は、無欲といふことを守らねばならぬ」

と諭され、扱て、

「自己一人は之れを實行しても、民百姓が之れを守らねば如何んともすることが出

來ますまい」

と云ふと、上人は、

「それは、人民を責める必要はない。執權者それ自身が欲を去れば宜しい」

と言はれたと云ふことである。これは、華々しい舞臺に現はれたことで無く、北條氏の善政を布いた樂屋の苦心である。

それから、泰時から轉じて、時頼も、尊王心の深かつたことは、世人の知るところであらう。單に、尊王心が深かつたばかりで無く、國家人民、安かれかしと云ふので、最も治世に意を用ゐて居つたことも、世人周知のことであらう。

古くから、今日まで、非凡な政治家は、随分、有つたと思ふが、古い時代では、時頼の如き、たしかに其の一人で、稗史の傳ふるところに據れば、時頼は、一處不住の雲水に身を窶して、六十餘州を回國して歩いて、民情を視察したと云ふことである。

今日では、大官運が、地方へ出てくると、意氣揚々として、觀察の美名の下に、大騒ぎをさせる。然るに、時勢が違ふとは云へ、輕装孤筇、飄然として、身を雲水に窶して、日本六十餘州の民情を視察して歩いたと云ふが如きは、何處へ出しても立派なものである。

その時頼は、如何にして精神を修養したかと云ふに、先づ、一國の人民をして、武士道的精神を旺ならしめ、日本魂を發揮し、元氣あらしむるには、先づ以て、自分自身を鍛へねばならぬと、はじめ、此の佛法へ入つて、さうして、久しく參禪したので、最初の師は、誰れかといふと、禪宗の中でも、曹洞宗の開山たる道元禪師であつた。

彼の道元禪師が新たに支那から御歸りになつて、都會の風塵を避けて、越前の傘松の里に庵を結んで居られた當時、時頼公は、其の道名、嘖々たるを聞いて、禪師を鎌倉に迎へて、我が館に半年餘りも御留め申しておかれた。丁度、年號から云ふ

と、寶治元年の八月頃と思ふ。寶治元年の八月から翌年三月頃まで居られ、時頼公は弟子の禮を執り、菩薩戒を授かつたのである。

あら磯の波もえ寄せぬ高岩に

かきもつくべき法ならばこそ

これは、時頼が參するについて、禪師が、見性成佛を詠みて御示しになつた道歌である。

これが、抑も始めて、それから、半年餘りで、禪師は越前に御歸りになつたが、丁度、その時分、多分、寛元四年頃であつたらう、請はずして來たられた大覺禪師(蘭溪道隆)、これは鎌倉建長寺の開山である、この大覺禪師が見えろと、時頼公は、其の道名を聞いて、鎌倉郡大船村に常樂寺といふ寺が今までも有るが、そこへ御迎ひして、次ぎに、遂ひに建長寺を創建して開山とし、親しく師の鉗錘を受けられた。

そののみならず、東福寺の開山、聖一國師(辨圓圓爾)に參禪せられたので、當時、國師は、宋國徑山無準和尚の法を傳へて歸朝せられて居つたのである。殊に、時頼公は、文應元年に來朝せられた元庵禪師に參じて、遂ひに大悟徹底せられた。それを、聖一國師が、元庵の韻を次いで證明された偈がある。今、覺えて居るやうだから、偈頌だけ言はう。

大機大用大根人

鼻孔遼天獨露身

凛々威風行闊外

五湖四海一天眞

と云ふのである。

是れ程の肉身の菩薩でも、不幸、短命であつて、春秋わづかに三十七にして、此世を去られたのが、弘長三年十月二十三日であつた。その臨終の偈といふのを、山陽なども、其著、外史に書いて居るから、世人は既に承知であらうと思ふが、それは、

業鏡高懸、三十七年、一槌擊碎、大道坦然、

と云ふので、實に立派なものである。よほど、造詣の深い力が無くては、かくの如きことを言ふことは出来ぬと思ふ。時頼公は、たとひ、不幸、短命にして死なれても、その天下後世に遺した精神的感化は、ただ偉大なもので、今日、尙ほ、世道人心の上に、活き／＼して居る。

八、膽斗の如き相模太郎

扱て、此後に出たのは、誰れかと云ふと、今日の兒童走卒でも、能く知つてをる、彼の有名な相模太郎、即ち、時宗公である。頼義は「膽、斗の如し」と言つた。解剖したわけでは無いが、時宗公の膽玉は水甌の如く大きいと言つてをるが、今、書物について調べて見ると、時宗公が執權職になつたのは、年齢わづかに十九歳であつた。

この十九歳の齡に初めて蒙古から使者を寄越したのである。それから、三十四歳の時に、蒙古初度の來襲を受け、三十二歳、即ち、弘安四年、再度の大舉來襲を引き受けて、敢然として起つて、國家を双肩に荷ひ、一喝、外冠を掃蕩して、武士道を千歳に扶樹し、我が皇國を泰山の安きに置いたことは、眞に、是れ、空前絶後の壯舉と云はねばならぬ。

此の奇蹟に似たることは、彼の國の史乘にも見えてをるが、是れより先き、彼の蒙古は、國號を改めて元と稱し、時の元首、忽必烈は、これも世人の知る通り世界に名を得たる英雄で、英雄英雄を生むで、其親は成吉思汗と申し、これも有名な英雄である。

此の忽必烈は、當時、非常な勢力を有して、天下を蹂躪し、即ち、東は太平洋、北は北海道、それから西の方へ至りては、歐羅巴の獨澳の或る地點までも勢力範圍が達して居り、南は印度亞刺比亞を包み、さうして、亞細亞の八九分、歐州の大半

は、皆な忽必烈の綱の中へ入つて居つた時分である。

獨り日本が東海の一孤島として、超然として彼れの毒手を免れて居つた。若し、大蒙古を大なる鷲に譬へたら、日本は赤蜻蛉くらゐのものである。さうして、彼等が、他國を侵略するのは、唯だ、自己の封豕長蛇の欲望を満たさんが爲めで、殊に日本に押し寄せて來たのは、彼れの黒幕たる伊太利人のマルコポールが、日本は天國のやうな黄金國で、金銀珠玉、有らゆる世界の寶が満ち／＼てゐるから、早く行つて御取りなさいと進言したといふことが、歴史上に見えてゐる。

そこで、元から、初めて、使者を寄越したのは、時宗公の十九歳の文永五年で、そのとき、使者の持つてきた手紙は、一口に言ふと、信交しよう、御互ひに仲好くしようと言ふやうな手紙であるが、しまひに、我れの言ふことを肯かなければ、遂ひに干才に訴へねばならぬが、かうなると御互ひ不幸ではないかと云ふやうな脅し文句が入つてゐたので、其時は鎌倉幕府は答へなかつた。

其後、文永八年、更らに、超良弼を使として再度の手紙を寄越したのであるが、時宗は、猶ほも、其の國書の文の無禮なるを怒つて、其使の、京都、並びに、鎌倉に來るを許さず、唯だ、筑紫に於て、方外の聖一國師や大應國師をして、之れに應接せしめ、敵國の事情をも探らしめたのである。

再度まで、國使を斥けられたる忽必烈は、何んで點止すべきや、扱てこそ、我が文永十一年に高麗の戰艦を合せて改めて來た。此時、肥筑沿岸一帶の地方は、元兵の亂暴狼藉に委せられて、壹岐、對島の守護職は討死をなし、甚しきは、無辜の婦女を捕へて姦し、其上、掌に穴を穿ち、此に繩を通して軍艦の周圍に垂下げたといふことである。あゝ亦た慘ならずやと云はねばならぬ。

その翌年、更らに、杜世忠ほか五人を使ひとして、又たしても、我國を招きに來たのである。其時に、時宗は、

「彼れ無名の師を起して、斬殺を恣にしながら、尙ほ、厚顔にも、使ひを送るは

無禮至極である」

とて、直ちに龍口に於て、之れを打ち斬つてしまつた。此時、已に、時宗公が弘安四年の外冠に對する方針は一決してをったと思ふ。

これは、決して、輕舉妄斷ではない。而して、また、他の一面にば、彼我兩朝の高僧について、安心の秘要を受くる傍、敵國の事情を聞き取り、身は鎌倉の幕營に居ながら、大蒙古の狀況は、時宗公の手に取るやうに分つて居つたと思はれる。

然らざれば、如何に、膽、斗の如しと雖も、あれ丈けの大英斷は出來ぬ。

時は、弘安四年の六月五日、果然く、蒙古の水師は、筑紫瀉に現はれて來た。其兵船四十餘艘、水兵十四萬と記してある、其の大軍が、一時に、大なる口を開いて一營めと言はんばかりに、我國に攻めて來たのである。

勿論、その前より、時宗公は、力を盡くして、國防に留意し、戰備を怠らなかつ

たので、今でも博多に遣つて居るが、十四五里の間は、石壘を築き、さうして、鎮西の探題、北條實政を始め、諸國の武士の馳せ集つた軍勢が二十五萬といふので、天下は、恰も鼎の沸き立つ有様であつた。

畏れ多くも、龜山天皇は、身を以て國難に當らんと、伊勢の大廟に祈らせらるゝといふ有様で、「佛光錄」はじめ、いろく書の物について見ると、蒙古來冠の其日より我が佛光國師は、毎朝、楞嚴神呪を讀誦して、外敵降伏を祈られた。今、天下、臨濟宗の寺院にて、夏中、楞嚴會を營むのは、此時より始まつたのである。其他、有らゆる人を盡くして、命を天に任せて居つた有様が、歴然として、史上に現はれて居る。

佛光錄の中に、

「弘安四年、虜兵百萬在博多、略不經意、但每月請老僧一與諸僧下語、以法喜禪悅自樂、」

とある。而かも、他の一面には、佛天に向つて、敵國降伏を祈りて、且つ、能くも、油斷をせなかつたのである。又た、佛光錄の中に曰く、

「主師平朝臣、深心學般若爲保億兆民、外魔四來侵、學國生怖畏、朝臣發勇猛、出レ血寫大經、金剛與圓覺、及諸般若部、精誠所感處、滴血化滄海、滄海渺無際、皆是佛功德、重々香水海、照見浮幢刹、諸佛坐寶蓮、常說如是經、一句與一偈、一字與一畫、悉化爲神兵、猶如下天帝釋與阿修羅戰、念此般若力、皆獲於勝捷、今此日本國、亦願佛加被、諸聖神武威彼魔悉降伏、生靈皆得安、皆佛神力故、世々學般若、報佛猛力、」此の偈を讀んで見ても、時宗公が、人知れず如何に國家の危急存亡を念として居られたか窺はれるではないか。

龜山天皇の御製と承つて居る御歌は、

國民の誠こゝろを盡くしてし

後こそ吹かめ伊勢の神風

といふのであるが、この御製にて、當時、舉國一致の精神が如何に旺盛であつたか分らう。

これより先き、弘安四年の正月に、時宗公が國師の室に參禪に行かれた時、國師は、

「莫煩惱」

と言はれた。即ち悩むこと勿れと言ふのである。此のくらの事は、公は百も承知であるが、正月早々から斯く言はれたので、時宗公は變に思はれて、其意を問はれると、禪師は答へて曰く、
「春夏の交、博多、騷擾せん。而かも一風わづかに起りて、萬艦、掃蕩せん。願はくば、慮とする勿れ。」

と。春と夏の間、筑紫瀉が大いに騒ぐであらうと、かう云ふことを、此時、最早や、豫言して居られる。國師が、悟りの力で知られたのではなく、蒙古の國情を能く知つてをられたからで、決して、ヂタバタするに及ばぬ、必ず天風來つて皇軍を佑けるであらうと豫言された。果して、弘安四年の六月五日に至つて、彼の通り大擧して來たのであるが、戦ひの結果は、敵軍の生きて還る者、僅かに三人といふ有様であつた。

尙ほ、一つ、御話したいのは、當時、博多の急報、頻りに至るや、時宗は、甲冑を着して、國師の室に至り、

「弟子、即今、大事到來せり」

と云ふと、國師曰く、

「如何んが向前せん」

時宗、威を揮つて一偈せりとある。これは「四百餘州を擧る」と言つて、小學の

小供が歌ふが、其歌の根擧はかう云ふところから出て居るのである。而して、時宗が大喝するや、國師曰く、

「眞の獅子兒、能く獅子吼す。驀直に前進して回顧する勿れ。」

と立派に證明された。

さうすると、時宗の旗下、長崎次郎左衛門、太宰少貳、高橋道妙、宮内平左衛門、諏訪左衛門、糟屋三郎左衛門、稻津左衛門等、一騎當千の武夫等が、次ぎから次ぎへと國師の室へ來て、一々、活きながらの引導を渡して貰ひ、勇み進んで西に向つて出馬したのである。

世人の知る如く、鎌倉は、今ま行つて見ても、まことに猫額大のところ、北條氏時代の生活状態は、まことに質素にして、曾て、時頼公が、大佛某と、冬の寒い深夜に、生味噌で濁酒を飲んで、天下國家の問題を論じて居つたと云ふくらゐであつた。けれども、當時の日本國民は質實剛健であつて、義勇奉公の精神に富んで居

つたから、大いに内に恃むところがあつて、物資兵站すべて不十分、不完全なるにもかゝはらず、かくの如き大敵に當つて、痛快なる戦捷を得たといふことは、長く我れくが、後世、子孫に傳へて忘る可からざる美談である。此の意味に於て、時宗公は、僅か三十四歳で亡なつても、其の愛國護法の大精神は、今に至るまで、六千萬國民の頭腦中に活躍して居ると思ふ。

五、禪的修養の力が發して

さう云ふやうな有様で、此の禪的修養の力が發して、武力ともなり、善政ともなり、其他、有らゆる方面に關係して、鎌倉時代に於て、我が武士道が大いに發達したのも、此の佛教の眞髓たる「禪」の道が與つて大いに力ありと云つて差支へないと思ふ。

鎌倉の政治は何うであつたかと云ふと、勤儉尚武、是れであつた。佛法各宗は何

うであつたかと云ふと、前に述べた如く、直截簡明なる、

「南無阿彌陀佛」

「南無妙法蓮華經」

「莫煩惱」

是れである。此の直截簡明な安心決定の宗旨は、今の複雑なる社會生活に於ても、國家獨立の上に於ても、愈よ、益、その必要を感ずるのである。敢て、元來の宗教を崇拜するまでも無からふ。

因みに、當時の北條氏の位地を一瞥してみると、先づ、北條氏は何ういふ身分であつたかと云ふに、言ふまでもなく、彼等は、謂ゆる陪臣である。それで、時頼公なり、時宗公なり、彼の如く、外冠に對しても、又は、内治に於ても、共に、大功を奏してをるに拘はらず、其の官位は僅か一國の太守相模守で、位階は從五位でその待遇は、今の勅任にも及ばず、彼等が寤寐にも聖恩を忘れず、殆ど、活ける神

様の如く敬愛してをるところの天子さまにも、直接、拜謁を許されなかつた。それでも、彼等は、決して、不足と思つて居らなかつたやうである。

加之、時宗は、戦勝の神佑、佛恩を感謝する爲めに、新たに吾が圓覺寺を創立してをる。今日、北條氏は亡びてしまつても、精神的紀念碑たる此寺は、儼として六百餘年を経ても存立して居る。古諺に「陰徳あれば陽報あり」と云ふが、明治三十七八年日露戦役の時に當つて、叡聖文武なる 明治天皇は、大御心を以て、時宗の大功を追憶しましたし、破格の恩典を示させられて、従一位の贈位を賜はり、その式典を圓覺寺に於て擧げたのである。

今日、我が六千萬の同胞が、軍人は勿論、實業家も、政事家も、誰れも、彼れも、皆な能く此の武士道的剛健勇猛の氣概を具へて居るであらうか。將來、經濟上の戦争に於て、果して、時宗公が外冠に對して成したる如く、痛絶快絶なる大功を立つる者があるらうか。聊か疑ひなき能はずである。

初めに述べた、奢侈、淫靡、惰慢、享樂は、實に、目下、吾が同胞の大敵である。納が斯様な題を出したのも、聊か、時事に感ずるところが有つてのことである。幸ひに之れが杞憂であるならば、納の喜びとするところである。